絶望の少女は第二魔法の担い手と会う

アストレアセカンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶望の少女は第二魔法の担い手と会う

【Ｎコード】
Ｎ７４１７Ｖ

【作者名】
アストレアセカンド

【あらすじ】
ハルケギニア、アルハインツ家に生まれたセリム＝アルハインツは母が平民メイジであることを理由に家から捨てられた。２歳にしては聡明なセリムだったが、父親のカリオス＝アルハインツは伯爵家の次女との婚姻のため、邪魔になったセリムを殺害しようとする。
だが、死にかけたところを彼女は救われた。異世界の魔術師、遠坂凛と衛宮士郎に。
セリムは成長と共にハルケギニアに対してのトラウマから力を手

にしたいと思うようになる。

これは、セリムが生きるために絶望を経験する物語である。

絶望から始まる物語（前書き）

注意

このお話はグダグダです。面白くないと思いましたらブラウザバックしてください。亀更新、不定期更新です。終わりが見えない、独自設定上等です。あまり文章構成がうまくありません。

ゼロ魔とＴｙｐｅ－Ｍｏｏｎの二次制作です。主にＦａｔｅですが、いろいろと出てくるのでＴｙｐｅ－Ｍｏｏｎです。別に書いている小説が少々行き詰まっていて、何か指休め的なことで書いているのがこの小説です。

長編にするつもりですが、基本真面目に書きたいです。二つの作品は二次制作の知識とアニメ、Ｗｉｋｉぐらいしかありません。なにとぞ大きな心で見てくれると幸いです。

不定期更新、亀更新は当たり前。できたら一気に流します。これは私のスタンスなので了承をば。

設定が気に食わない、こんなの絶対おかしいよ、作者が気に食わないなどとお思いになられましたらブラウザバックで戻ってください。二次制作なので変だとか作品との齟齬だとかは出るので、そこらへんはおおらかにお願いします。

修正

小説本文に間違って記載したまえがきの一部を修正しました。本当に申し訳ありません。

絶望から始まる物語

私は今日。父に用無しだと捨てられた。

「私の、アルハインツの家名を受け継ぐにはお前の欠陥はひどすぎた。恨むのなら才のない自分を恨むのだな」

父、カリオス＝アルハインツはそういい放つ。母は数年前に死亡していて、ラインメイジだったことは覚えている。だが顔は思い出せない。私が産まれてすぐに息を引き取り、故人となった。

突然突き出された現実に困惑していると、首根っこを捕まれて否応なしに引きずられる。

「お、お父様！？」

だが、お父様は聞いてくれない。なにも言わず、ただ無言で私を引きずっていくだけだ。地面に当たったお気に入りだった靴がどんどんと汚れていく。

私は今二歳になる。母から継いだとされる銀色の髪と、ふんわりと流れる髪は自慢だった。だが、ことあるごとにお父様は私を気に入らないといい、お母様との痕跡を消そうと躍起になっていた。

後から知ったことだが。お母様はメイジであったが貴族ではない。いわゆる嫁いだのではなく無理矢理子供を作らされたのである。お父様は女癖が悪かった。一歳の時から自我があった精神は愚痴るメイドの話を聞いていた。

そして私を捨てた日。お父様は伯爵家の次女との婚姻を結んでいた。

「お父様・・・・・私、いらないの？」

閉め出されたドアを見ながら呆然とつぶやく。

家の中では宴会騒ぎになっているとは露ほども知らず。私はいつものお仕置きだと思っていた。お父様は私が気に入らない場合は地下に閉じこめ、腹の空かしたコボルトが檻の中で犇めく所に投げ入れた。

もちろん中は異臭と呼ぶのも可愛いほど。それこそ普通の子供なら近づいてコボルトに食われてもおかしくないような、それはひどい環境だった。

檻の中では常に死肉をねらうハンターがいて、私を襲ってこないのはひとえにそれだけの体力すら残っていないことを示唆させる。むろん檻の外から眺めるだけだった私には気がつかなかったが、万全な体力があれば我先にと檻に激突し、歯牙を見せながら威嚇体制を取っていたことだろう。

すべてのコボルトは生きるために必死で、仲間の肉を食らって生き繋いでいた。骨をしゃぶり、肉を租借し、唸りながらそれでも食らっていく。

それは食物連鎖の一環だった。弱いものは食われ、強いものは生き残る。

まざまざとそれを見せられた私は最初、失禁しながら気絶した。

いつもと同じ、ただのお仕置き。そう信じていたかった。

「・・・・・・お父様・・・・・・」

中から楽しそうな声と、きれいな音楽が聞こえてくる。私を追い出した後、すぐさまお家は明るい雰囲気を纏った。メイドは働きだし、執事は忙しそうに準備をする。

「・・・・・・・・・・・・。私、いい子にするから・・・・・・だから、お家・・・・・・」

嗚咽混じりの悲鳴は楽しげな音楽に一蹴される。寂しさよりもただ、胸を抉るような痛みが辛かった。

事実は分かっている。私が出来損ないだから捨てられた。精神力は本来ならあり得ない空っぽで、故に魔法の行使は絶望的だった。

トリステインでは魔法は貴族の位の次に重要視される。未来において半人前にもなれない私は、欠陥品として捨てられる次第となった。お母様はラインメイジ。お父様はトライアングル。最低でもラインは欲しいと考えていたであろうお父様に告げられたのは落ちこぼれの娘だった。

そんな娘は、生きているだけでお父様の人生の汚点となる。お母様との婚姻は事実上無効だ。だからお母様も私も、『無かったこと』にされる。

「・・・・・・お家、入れてよぉ・・・・・・」

誰も私を知らない。見たこともない。それが今日、メイドと執事に父が与えた命令。ただの浮浪児が父の家に乞食としてやってくる。扱いはそれに相当するものでいい。

父にとって、私はもはやいないものだとされた。

故に、ここにいる私は貴族の娘でも何でもない、『ただの物乞いの平民』になってしまった。

「さっさと出ていきな！！」

縋るようにドアに呼びかけていた私を料理長が怒鳴りちらす。鬱陶しいとばかりに怒気を上げ、睨むようにこちらを冷たく見下ろしていた。

冷たい、まるで氷のように冷えきった目。侮蔑、軽蔑、怒り。負の感情を詰め込んだ視線はたやすく私を射抜いた。

「・・・・・・・ぅ・・・・・・・・ぁ・・・・・・・」

あまりの迫力に声さえでない。鼻息を荒くしてこちらを睨むのは昨日まで愛想良くしてくれた人だった。

「全く、鬱陶しい子だね。あんたは捨てられたんだ。早く消えとくれ。作業が遅れちまうよ」

冷たい双眸が私を見抜いた。有無を言わさない迫力を纏った彼女は、動けない私に近づいてきた。

「こっちはね、あんたみたいな嫌いな餓鬼にもへこへこ頭を下げなきゃいけない商売をしてるんだよ。だけど、あんたがここの娘じゃなくなったっていうんなら話は別だ。私とあんたの立場は対等。とっととどこかに行っちまいな。餓鬼」

「わ・・・・・・私、いや、・・・・・・・お家・・・・・・・お家に・・・・・・・かえりたい・・・・・・・」

料理長はため息をはくと、私のお腹を蹴りあげた。息が漏れる。肺が潰れるんじゃないかと思えるほどの力がお腹に襲いかかってきた。

何発も何発も。軽い体は地面から浮き、鈍い音を立てながら反響する。体の中から音がいくつも聞こえた。

「ああもう！　それを私にいっても仕方ないだろうが！　もうイライラする餓鬼だね！」

料理長は何度も何度も私を蹴る。

つい数日前に料理長が褒めてくれた銀髪は、料理長に踏まれて土にまみれていた。

喉の奥から沸き上がる不快なものを吐き出す。赤々とした血が、夜になり始めた夕日と相まってよけいに紅く見える。

血を意識し出すと、急激に頭は冷えていった。

青くなった顔で、このままだとどうなるか考える。決まっている。殺されるに決まっている。

興奮して顔が赤く染まった恰幅のいい料理長は私を掴んだ。髪を持ち上げ、腰に首もとにまで延びた髪が、料理長の指に絡まり、力一杯引き上げられる。

悲鳴にも似た声が一瞬でかかった。しかし、声がのどを振動させる前に料理長の手の方が数段早かった。声はなにもなさず、ただ空気として抜けていく。

「色気付いた貴族の娘が、なにも知らない風に平民をあざ笑いやがって・・・・・・何様のつもりなんだい」

鋭利な何かを思わせる。そんな視線が突き刺さった。睨む視線には殺意が芽生えていて、今まで我慢していた感情のダムが決壊するがごとく。激情に流された料理長は支離滅裂な暴言を吐いてから私を地面に叩きつけた。

「は・・・・・・ぐっ・・・・・・」

頭を強かに打ちつけてしまった。脳震盪でも起こったのか、視界がぼやける。目の前の影が一つ二つにぶれ、今どうなっているのか分からなくなった。

軽い体重が幸いしたのか、地面が柔らかい土だったからか。どちらにせよ、私は助かった。

「もう、私をイライラさせるんじゃないよ。出ていきな。元貴族の餓鬼」

バタンと、ガチャリと。彼女はドアを閉めた。散々痛めつけられ、

呼吸すらままならない。幸いにしてだが生きてはいたが、彼女の暴行によってお腹の中がぐるぐると回っていた。

「お、・・・・・・ぅえ・・・・・・」

気分が最悪だった。故に吐き出した。ドロドロと消化不良だった昼食が、原型をとどめないほどの形で出てくる。胃液に混じった特有の酸っぱい臭いがツンと鼻をつく。

血が混じったそれは、確かに私が吐き出したモノだった。

消化仕切れなかったパンが、胃液を吸ってひしゃげている。あまりみたくないものから目線をそらす。しかしあたりに漂う酸っぱい臭いは否応なしに臭い、私の意識をそこへと向けさせる。

意識しないように努め、これからのことを考える。私は捨てられた。なにも残っていない。眠るところも、食事すらもままならない。

昨日までとは違うのだ。生きるためには、生きているだけでは死んでしまう。餓死。それともオーク鬼に殺される。それとも山賊に連れ去られて売られる。それとも女だから犯されてしまうのか。

不安だけがぐるぐると頭を巡った。不安だけが、私を支配していた。

生きるためには汚水でも啜らなければ生きていけない。名誉も、栄誉すらも剥奪され、汚らしくも生きていかなければいけない。

ふと目を見上げる。

先ほど吐き出した、パンの一欠片。これから生きていく上で、もはや口にすることが少ないであろう小麦の塊。

それを、躊躇しながらも手を伸ばす。

口に含むと、口腔が異物を感じ取って吐き気がおそってくる。味は最悪だ。パンを噛めば噛むほど胃液がにじみ出て、より一層吐き気を誘う。

喉を通ったモノが吐き気とともにせり上がってくる。それを無理矢理押し込む。ジャリジャリと泥混じりのパンを、胃液があふれ出てくるパンを、これでもかというほどに詰め込んだ。

情けなさと惨めさが残った。なまじ貴族というものしか見ていない私にとって、外の世界というのはおとぎ話の世界なのだ。

コボルトは見たが、オーク鬼は見ていない。平民がどんな生活を送っているのかすら知らない。ただメイドの愚痴と書物の内容だけが私を精神的に成長させた。

泣きながら吐き出したモノをもう一度飲み込む。最悪の気分を味わった。キリキリと痛むお腹と、胃酸によっておかしくなった喉が惨めさをよけいに強調してくる。

厨房は忙しそうに動いていた。

ドアは依然として堅く閉ざされたままだが、今にも中から料理長がきて殺されるかもしれないという妄想とも断言できない未来予知が広がっている。

とにかく、反対側の森へと急いだ。また料理長にかかわると、今度こそ殺されてしまうという確信があった。

口には残飯の残り滓がつき、涙と涎は服を汚している。無心に食べた吐き戻しは服にも付いていて酷い臭気を放っていた。

広く開けた大地。緑が続く道の上を必死になって走り、転けては走ることを繰り返す。一刻も早く、家から逃げたかった。いやな予感が止まらず、背中にはびっしょりと冷や汗をかいている。

森はあと数キロメイル先にあった。息をすることも忘れて、一気に一キロメイルは走った。産まれて初めての全力疾走に肺がビックリしている。痛いほど動く心臓が内側で大きな音を放っているのみで辺りは静寂に包まれている。

しかし次の瞬間、聞き慣れたといってもいい声が聞こえてきた。

『さあさあ皆さん！　ここで余興をと思います！！』

背筋が凍った。拡張の魔法を使ってわざわざこちらに聞こえるように声を放ったのは、父の声だった。もう一キロメイルも離れているとはいえ、見えないものでもない。何せ辺りは漆黒に染まりつつあるとはいっても開けた大地。そこに人間がいればイヤでも目立つ。

『今！　森に向かって逃げている奴隷に、見事魔法を当てた方に、賞金を差し上げましょう！！』

逃げた奴隷。それは私のことだろう。

私を使った的当て。それを理解するのに時間はさほどかからなか

った。詳しくルールの説明に入ったお父さんは拡張の魔法を消し、私に逃げるまでの猶予を与える。

足は痛い。膝は擦りむけ、血が流れている。筋力の発達していない三歳児にはきつすぎる長距離走。魔法もなにも、抵抗する手段がない私にとっては先ほどの宣言はまさに死刑宣言だった。

逃げなければいけない。ノロノロと立ち上がった私は少しでもと歩き出す。後ろに強烈な悪寒を感じて横に飛び退くと、先ほどまでいた場所には氷のつぶてが刺さっていた。

ウインディ・アイシクル。まっすぐに飛んできた氷の槍は、私に死を連想させた。

『惜しいですな！　まあ余興です。いたぶってから殺すというのも乙なモノですな！』

本当の恐怖がせり上がってくる。肝まで冷えるような、冷や汗が止まらない感覚を味わった。

家は煌々とした明かりが灯り、その灯りに混じって赤い色が見えた。

ファイアーボール。次の魔法は火らしい。

私の左足をちょうどかすめる程度に飛んできた。操作をしているぶん、先ほどのウインディ・アイシクルよりもやっかいだったのは、地面にぶつかった瞬間に燃え移ったことだ。足には軽くやけどを負い、黒い煙が喉に入る。

のたうち回って涙目になる私を見下している貴族は大いに笑っていた。

下卑た笑いは結構離れているこちらにまで響いてきた。

逃げなければいけないというのに足が動かない。

地面がせり上がり、ゴーレムが形成される。そのゴーレムは石ころを掴んで私の方向に力任せに投げてきた。

命中率は低いが、何度か石が肌を掠る。大きな石が当たったときには簡単に吹き飛び、額には石で切った切り傷からぬらぬらとした血が滴る。

腕にも当たったため、痙攣する腕をもう片方の腕で押さえながら歩く。息は不規則になりがちで歯はカチカチと震えていた。

何度も魔法が近くを掠る。火は体力を奪い、氷は恐怖を煽り、土は傷を増やしていく。

足はもう限界だった。ガタガタと死の恐怖に耐えかね、失禁してしまった内股に黄色い液体が流れていく。顔は涙と恐怖でだらしなくひきつり、震える口からは涎が垂れ流しだった。

明確な死。それを感じた。

一瞬後には死ぬかもしれないゲーム。いや、森にたどり着くこともできずに死ぬだろう。これは逃がすためのモノではなく余興だ。わざと魔法をはずして、観客に楽しんでもらわなくては余興ではない。

二巡目はより精確だった。

一人だけ、炎の魔法を放った人がいた。それは私の頭を燃やし、自慢だった銀髪を燃やし尽くす。

地面に転がり、火を消そうとする様は爆笑を誘っていた。縮れた髪はほとんどが焼き切れ、いやな臭いが辺りに広がる。

ウインディ・アイシクルが何度も襲いかかり、腕や足に創痍を絶えず与えてくる。

「もう・・・・・・だめ・・・・・・・」

私の意識は遠くなっていく。足は棒のようになり、一歩も動かせなかった。荒い息が耳元で聞こえると思えば、気がついたときには地面に自分が倒れているのだと気がつくのに時間がかかった。

「・・・・・・はっ・・・・・・・・はっ・・・・・・・」

死にたくない。その想いが私を前にと進ませる。こんな惨めな死に方があるか。悔しくて涙が止まらない。

勝手に産み出されて、いらないと分かれば捨てられて。

貴族の見せ物になって、殺されると。

ふざけないで。

「私・・・・・・死ぬ・・・・・・・いや・・・・・・・・いや、いや、

いや、いや、イヤ、イヤ、イヤ、Ｉャ、いＹａ、いや」

獣に近い、本能に任せた叫び声。その時、何かがカチリと合わさるような気がした。

パズルが組みあがるような。歯車がかみ合うような。

一瞬だけ見えた世界。泡の中。何もかもから守られるように展開する光景。それが水の中の光景なのだと知るよりも早く理解した。そのような世界に、なぜかあこがれを持った。

何人からも自信を包み込む広大な宮殿。脳裏に刻まれるがごとく、その微細は記憶されていった。

だが、そのような妄想は現実に犯され、急激に視界をフェードアウトしていく。走馬燈という奴だろうか。死んだ母の笑顔。ほんの一瞬、それが目を覆う。

「あ・・・・・・」

だが、それを切り裂いて飛び込んできたのは色とりどりの魔弾。小さな声が喉から自然と漏れた。

迫ってくるいくつもの光。青に赤に土色のそれ。飛来する形で一斉に放たれたそれは、私の体に突き刺さっていく。

ただ身長が小さいのが効を成したのかウインディ・アイシクルはそれほどは当たらなかった。ただ石は体のあちこちを殴打し、火は地面に広がっていく。

汚いボロ雑巾のように転がった私の中身が出た。血が、どんどん体から流れ、冷たくなっていく感覚が伝わる。

「・・・・・・・・ぁ・・・・・・・・」

ヒューヒューと呼吸はせわしなく動くが、火を吸い込み、煙を吸い込み。徐々に頭だけは死を受け入れつつあった。

死。覚悟を決めると、それはなんと言うことでもない気がしてきた。時間の感覚さえ曖昧になる中、虚ろにさまよう視線は焦点すら定まらずぼうっと空を見ているだけだった。

星と月の明かりが完璧に今を支配する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう何も考えたくない。どうやったら生きられるかなんて考えるのも、億劫だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

悔しいな。胸に去来するのはそんな感情だった。

悔しい。ただ悔しかった。力のない自分が、実の父に殺されることが。液体という液体が体中からあふれて、汚いまま、泥にまみれて、見せ物にされて。今の自分に腹が立つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ゆっくりと、それは落ちてきた。頭を狙った巨大な氷。鋭角にと

がった三角錘は重力に負けて落ちてくる。あれが刺されば、頭はザクロのように吹き飛ぶだろう。

脳漿をぶちまけて地面を汚す。

未来はいつだって、今より悲惨にしかならない。なら、そんな未来などいらない。私は今だけが支えだった。私は、生きている今だけを、永遠に大切にしたい。

「・・・・・私は、・・・・・こんな、結末、いらない！」

声にでたかも分からない、そんな思い。鋭角に尖った氷の塊は飛来してくる。

だが、私が生を諦め、目を瞑ろうとしたときにそれは見えた。

綺麗な極光が氷を粉々に切り裂いた。つぶてが光に反射し虹色になり、幻想空間が展開されたかのようにイルミネーションが広がっていく。七色の光は破壊を産み、光線となって夜空を両断する。

「大丈夫かしら」

そこには、黒髪の女性と赤銅色の髪を持つ男性がいた。二人の年は大人と呼んでも差し支えがないほど。老練の雰囲気を醸し出す男性とは別に、女性はあくまでも女性としてのスタンスを守りながら話しかけてきた。

慈悲深い、優しさあふれる笑顔があった。

「遠坂。早く治療してやれ」

「はいはい、全く。ようやく大師父の宿題が進歩したかと思えば修羅場なんて。どうせ士郎の幸運値が低いせいだわ」

「う・・・・・・関係ないだろ」

軽い掛け合いを交わす男女は口調とは裏腹に目線は厳しかった。男性は士郎と呼ばれ、何も無い空間から赤い布と剣を取り出す。

女性は宝石をいくつか取り出し、治療に移る。今まで痛みを発していた部分の痛みは和らぎ、呼吸も安定している。杖も無しに魔力行使を行う様子は、まるで伝承のエルフみたいだった。

「こんな小さな子を、くそ」

「士郎。落ち着きなさい。これでも、私だって腹が立ってるのよ」

女性は治療を続け、男性は迫りくる魔法をはじいていた。まるで勇者みたい、などと戯けたことを考えても仕方ないと思う。これが幻だったとしても、自分の都合のいい夢だとしても。

「・・・・・・内部の損壊が激しいわ。・・・・・・って、この子、まずいわよ！　士郎！　早く終わらせないとこの子、死んじゃうわ！　この子を今すぐ抱えて戦線離脱！！」

「ち・・・・・・っ、分かった。遠坂、最後にでかいの、かましてやれ！」

「ＯＫ！　いっくわよー！！」

一線。空間が七色の光で覆われる。何度見ても綺麗な光景だった。家は、光線に貫かれ、炎上した。どういう原理で、何を基盤にして、あの光線は作られているのか。

ただ目に焼き付いているのは無骨に積み上げられた宝石から発する光と、優しく抱えてくれる男性の腕だけを感じていた。

絶望から始まる物語（後書き）

不定期に更新していきます。

運命邂逅　1（前書き）

書き溜めていたものを消化します。

運命邂逅　1

ＳＩＤＥ　遠坂凛

遠坂凛は考えていた。もう少女ではなく女性というにふさわしい体つきになり、胸もそれなりに膨らんできた。そろそろ子供も欲しいかしらと士郎に歩み寄り、従者や電話口の妹にそれとなく邪魔される日々が続いている。

そんななか、大師父、ゼルレッチ＝シュバインオーグが残した宝石剣を、私たちの悲願を、衛宮士郎完成させた。いや、してしまった。設計図を読みとって８ヶ月目で達成しやがったのだ。

遠坂だけではない。エーデルフェルトも他の大師父の末裔もこの所行を知ったとすれば衛宮士郎を激怒しただろう。

これには泣いた。おもいっきり泣いた。湯水のように使われ散財してきた宝石のために泣いた。

そう。これは剣だった。衛宮士郎が得意とする、剣だったのだ。士郎にかかれば剣の投影で不可能ということは例外を除いて存在しないのだった。英霊の武具でさえ投影する企画外の魔術使いに常識など押しつけてはいけなかった。

うっかりが過ぎる。それが遠坂凛が自分に向けた感想だった。

だがそれはもう過ぎてしまったこと。反省しよう。うん、反省した。

「だから、何でそんなこと黙ってたのよ士郎！！」

時計塔が震撼するくらいに声を張り上げる。慌てふためく目の前のバカは、しれっと答えた。

「落ち着け遠坂。これ、贋作だぞ。あの爺さんの本物と比べたら存在感も違うし・・・・・・」

「贋作でも宝石でしょ！　っていうか！　あんたいつ大師父に宝石剣を見せて貰ったのよ！？」

世界中ならまだ見つかるかも知れないが、異世界中となれば会える機会などそうそうない。だが目の前のこの男、幸運値が低い割に問題ごとに対しては幸運値がＡなんじゃないかと思う。

事実士郎は大師父に気にいられている。まあセイバーも気にいられているのだろうか。時計塔にたびたび顔を出しては士郎とついでに私に会って近況報告を聞いて去っていく。それが大師父のサイクルとなり、時計塔の他の魔術師は士郎についてなにやら疑いを持ちつつある。

魔法使いがわざわざ会いにくるほどだ。魔術は隠匿すべきものだと士郎も分かってはいるが、下手に有効範囲を広げて取り入られ、投影魔術を知られるのはまずいのだ。

事実確認をここ三日ほど受けていた。ロード・エルメロイ?世が庇ってくれなければ今もまだ時計塔の一室に監禁紛いなことを迫られていただろう。

セイバーにはそれなりに士郎を気にしてもらっているが、まさか

大師父が自ら宝石剣を見せびらかすなんて考えつかなかった。

「一週間ほど前か。設計図だけじゃ無理だって言ったら、本物を見せてやるって言われて」

・・・・・・。士郎の気にいられようをみていると私が惨めに感じるのはなぜかしら。

「宝石剣は砕けば消えるし、本物より性能が低いからさ。使えないぞ。マナがあふれる場所じゃないと、ただの宝の持ち腐れだ」

「・・・・・・」

「それに、こんなの出回ったら俺は封印指定だろうが。あれのしっこさは知ってるだろう」

「・・・・・・」

「な？　これでも本物の７割も満たない張りぼてだぞ」

張りぼて。それが私の頭の中に残った。つまりアレか、目の前のバカは、完成度７０％ではお話にすらならないというのか？　あくまで真作に近づけなければ意味はないと仰るのか！？

これでも十分な研究は可能だ。少しズルいけれど、テスト用紙をカンニングするようなものだけれど。７０％を解析して残りを遠坂の技術で埋めるという選択はこいつの中には無いのだろうか。

長年のつきあいになるが、もう何度士郎の不条理さに泣いたことか。

次第に、腹が立ってきた。

「う」

「う？」

「うがーーーーーーー！！」

「待て、落ち付けって遠坂！」

「落ち着けるか！　アレよ？　魔術師たちが夢見る根元への足がかりを、未完成とはいえたった八ヶ月、そうよ八ヶ月よ！？　私の２０年余年をあっさり否定して、すっとぼけんの！」

「いや待て、話し合おう。な？」

「聞く耳持たず、ぶっちＫＩＬＬ！！」

私は感情の赴くままに士郎を殴る。殴る。殴る。

こいつはことの重要性を軽視し過ぎている。士郎の魔術は、はっきり言って魔法にもっとも近い大禁術。しかも贋作とはいえ、剣に限られるとはいえ、聖遺物や聖剣、魔剣の投影すら可能とし、その全てを弓のように投擲し行使できる固有結界『無限の剣製』を持っている。

魔術教会に見つかれば即アウト。脳髄のホルマリン漬けに直行する。

「魔法っていうのはね、もう5つしかないの。第一魔法は継承者がいないし！　第二魔法は大師父、第三魔法はアインツベルン！　第四魔法はそもそも、使い手の存在すらあやふやだし、第五魔法は破壊の権化、ミス・ブルーなのよ！？」

第一魔法は無の否定。無から有を生み出すことに念頭をおいたもの。

第二魔法は平行世界の運営。宝石剣・キシュア＝ゼルレッチにより確立されている。

第三魔法は魂の物質化。アインツベルンが聖杯戦争に用いた技術は第三魔法の一部分である。

第四魔法は情報に規制がある。噂ではアトラス院の誰かだというが、巨人の穴蔵は情報に対しての規制は一般魔術師以上に厳密にする。故にどうあっても知られることはない。

第五魔法は時間旅行。青崎が成し遂げた魔法だが、詳細を私は知っていない。

第六魔法はエルトナムの死徒が作り上げようとして失敗したために存在はしない。

そうなれば現存する魔法はたった三つ。どれも奇跡の体現であり、常人には理解できないほどいっちゃってる技術なのだ。

それを、第二魔法の結晶をお手軽に作られては、モチベーションが一気に急下降だ。

衛宮士郎の魔術は、欠陥のある魔術だ。何せ、後継者がいない。いや、できない。

衛宮士郎の心象風景の具現が投影魔術の元であり、一代限りの奇跡の体現者というわけだ。

剣に限っては、士郎は奇跡の再現が可能だ。失われていった英霊の武具を再現する。奇跡の垂れ流し。格好の研究材料だ。たとえ贋作で8割しか再現できないとしても、8割は本物と同じなのだ。

封印指定を受け、今後の魔術の発展の為に殺される。それは分かりきった答えだ。ともすれば、素人が魔法を築くことを肯定などしたがるだろうか。

それに衛宮の姓も厄介になる。

目の前ののほほんとした顔にガンドでも打ち込もうかと本気で悩む。このアンポンタン、自分がどれほど危険か承知していないのだ。

まあ、それを承知していながら宝石剣の販売ルートを割り出していた私も私だが。

「とにかく、あんたの投影はね、魔法に近い奇跡の体現ってことは重々承知なさい！」

未だ納得がいかないような顔を向ける衛宮士郎。ああ、こいつ、何で自分が怒られているのか理解していない。

こういうところは相変わらず鈍感だった。もう聖杯戦争から5年ほどの付き合いになるというのに、未だに私の行動や桜の奮闘は軽

く流されてしまう。頭が痛い問題だ。

所々で殺意が沸くが、こういう奴なのだから仕方ない。

もうそこは諦めの境地。諦観。

「はあ・・・・・・」

「ため息つくと幸せが逃げるぞ」

「バカね。ため息がつくから幸せが逃げるんじゃなくて、幸せじゃないからため息をつくのよ」

ことりと、宝石剣を机におく。光の関係で七つの光を放つダイアモンド。贋作だと分かっていても、この何割かは本物に限りなく近い。

ゴクリと喉が鳴る。

今の時勢、偽造宝石を適正価格で売ることは犯罪だ。しかし、魔術とはあらゆる犠牲『社会的信用』を払ってでもたどり着く境地。それを物欲的な生涯『要は金欠』で邪魔されるとあってはそれこそ・・・・・・。

エーデルフェルトに高値で売れば、それなりに資金になるのではないだろうか。

あそこなら転売などしない・・・・・・いやいや、不倶戴天の敵から金をかすめ取るだけに塩を送るとは如何に。こんなチート、大師夫に見つかったらそれこそ異世界案内ツアーじゃないだろうか。

「遠坂、目が$の形になってるぞ」

「嘘！　ちょっと人聞きの悪いこと言わないでよ！」

一瞬だけ。そう、本当に一瞬だけ。考えが頭をよぎっただけだというのに。

「全く。じゃあ、棄却するぞ。あんまりちらつかせていいものでもないしな・・・・・・」

いそいそと士郎は宝石剣を取り上げる。現存するサーヴァントにも等しい奇跡を簡単に消されてはおもしろくはない。なによ、あともうちょっとだけ見てても罰は当たらないはずなのに。

ふと、一度宝石剣を使ってみたい衝動に駆られた。

遠坂は大師夫から設計図を託されている。つまりは作った暁には使用を認められている。魔法の運営。平行世界へと穴を開ける行為。魔術師としての喉がなるほどの魅力があった。

少しくらい。私の中の悪魔が甘い誘惑を提示してきた。

「ね、ねえ、あとちょっとだけ」

「・・・・・・いやな予感がするんだが」

その、いかにもおまえうっかりやらかしそうだなみたいな顔をするのはやめて欲しい。でも今からのは大丈夫。ちょっと次元に穴を開けてみるだけだから。

「少しだけだぞ」

士郎は疲れたようにため息をはいた。様々な角度から見回し、構造を脳裏に焼き付けていく。そして軽く。魔力をほんの少し込めて放った。手首のスナップを利かせてほんの少しだけ。

「「・・・・・・・・・・・・」」

出来心だった。まさか本当に成功するなんて。

緑豊かな、異世界はそんな場所だった。森林伐採が盛んに行われている今となってはこのような未開の土地など珍しい。さらには大きな城のような屋敷と夜空に浮かぶ双月。異世界で間違いない。

あれ、もしかして私、やっちゃった？

「遠坂！　どうするんだよコレ！　尋常じゃないマナが溢れてるぞ！　まさか神代の世界にでも繋いだのか！？」

「ええっ！？　私そんなのしてないわよ！　ちょっと軽く適当に繋いだだけじゃない！」

・・・・・・はっ！　適当でもこの威力。つまりは私には秘められた力が・・・・・・。いや、宝石剣の完成度が高い所為ね。

「・・・・・・ま、放っておきましょ。時計塔には魔力の暴発って伝えておくし。この部屋には士郎専用の耐魔力符が張り付けられてるからそうそう外に魔力が漏れることは無いでしょう」

「楽観的なんだが、いや、それがベストだな。うん。俺たちはなにも見ていない」

「いい判断ね士郎。やっとあなたも魔術師らしくなってきたわ」

はっはっはと笑いあう。お互いに処理能力を超えた事態に頭が麻痺していたのかもしれない。

だが、それも、大きな屋敷から放たれた魔術の兆しによって遮られた。

「まず・・・・・・もしかして気づかれた？」

しかし、見当違いもいいところに魔術は放たれる。笑い声が聞こえるし、もしかしたら魔術師が集まって仲良く腕の見せ合いでもしているのかしら。

平行世界だからこんな考えが沸くが、この世界ではあり得ない。巨人の穴蔵に代表されるが魔術師の研究成果は自己のみに開示を許されている。そのような他人に見せびらかす魔術などあってたまるか。

「なあ、遠坂。やっぱりあっちの世界は魔術系統が違うんだな。火の玉とか氷の針とか、なんか巨人を生成してるぞ」

「・・・・・・士郎。もう一度お願い」

「だから、火の玉とか氷の針とか、巨人の生成をしたりしてる・・・・・・」

「巨人？　それってどんな？」

「ゴーレムって奴か？　でも使われている魔力量は低いみたいだ。たぶん、俺の強化の魔術並の魔力量で動かしてる」

「・・・・・・異世界だもの。そういうこともあるわ」

「それと、なにやら物質変換の魔術もあるみたいだ。ただの土が青銅に変わってる」

「・・・・・・異世界だもの。ということはここの世界の魔術を納めれば、純度１００％の金の量産も可能かしら？」

「多分できるな。変換後は魔力を消せばただの青銅のままだったし」

「・・・・・・何てデタラメ・・・・・・。いや、まてよ、ここの魔術を学べば・・・・・・」

お金に困ること何てないんじゃない？　・・・・・・。

「行くわよ士郎！」

「待て待て！！　異世界だぞ！？」

「いいから、どうせまた戻ってくればいいんだし！」

「だからって・・・・・・ん？　っ！！」

先ほどまで言い争っていた士郎の顔がこわばる。ある一点を凝視し続け、睨むかのように視線が送られている。魔術の塊の着地点に、

おおよそ許容できない光景が広がっていた。

誰かが倒れている。私でも魔力で補助した目でやっと見えるかどうか。それで人であるかは判断しづらいが、胸が上下に動いているような微かな動きを感じた。

「士郎」

言葉はいらなかったと思う。何せ、お互いの位置を確認をしたときには異世界に入っていたのだから。

一刻も早く。その思いが私たちを動かしている。未だに動いているということは助けられるかもしれないと言うことだ。士郎が飛び出していけば、宝石剣を行使できない彼は異世界に取り残される。故に私も動かざるを得ない。

「くそ・・・・・・」

悔しそうに士郎の顔がゆがんだ。また魔力の上昇を感じる。あの城からだ。ここと城、そして倒れている子を結べば綺麗な三角形が形成されている。

一キロ程の道のりが邪魔をする。届かない。距離が開きすぎていて間に合わない。士郎の方から魔力の迸りを感じるが、あの大きな氷塊をあの子に到達するまでに破壊するだけの威力と早さはない。

あまり平行世界へ干渉すべきではない。それは分かっている。しかし、それはあくまでどれほど干渉するかは個人の判断となる。何せ、これが知れ渡ると怖いのは平行世界へと足繁く通う大師父のみだ。

他の魔術師は、自分達の害悪足り得ないのなら放置する。

「士郎！　どいて！」

だから私は宝石剣の発動を決めた。

一線。真一文字に引かれた剣筋から七色の極光が飛ぶ。光もかくやと放たれたそれは、氷の固まりにぶつかると熱量と光量で乱反射を引き起こす。

内側から外に向けて大量の熱を放っているのだ。切られた端から溶けていき、プリズムのように乱反射を繰り返す。花火よりも美しい、空にダイアモンドの彩りが辺りを照らす。

「す・・・・・・すごい・・・・・・・」

私が引き起こした事態だが、私が一番驚いている。

宝石剣という規格外が起こした惨事に少し引いた。取り扱いには注意しよう。うん。

光は大源の急速な消失により消えていった。少し自身の魔力を込めれば平行世界からの相違時間軸から大源を引っ張りだして発動を可能とできるが、今の一撃で城は騒然とし、氷は溶けている。近づいても大丈夫と判断した。

駆け寄るとそれは女の子だった。

「大丈夫・・・・・・かしら・・・・・・・」

それは命が持つかどうか。それ程までに与えられた傷は深いものだ。

冷静に対処できるのは聖杯戦争の経験故だろう。死体の前では多少躊躇するが、虫の息の相手に判断ミスや恐怖を抱くのは最悪だ。

ここ数年無茶に無茶を重ねる士郎のおかげで治癒魔術にもそれなりに明るくなってきた。

だがここ一番でうっかりをする癖は直らない。むしろ呪いだから解呪しなくてはいけないのかもしれないが。

身なりはいいのか悪いのか分からないが、純白のワンピースを着ている。が、服は擦り切れ、所々に血が滲んでいる。苦しそうにあえぐ姿は胸に不安を与えてくる。

それよりも、彼女の身長にびっくりした。

士郎が警戒してくれている分、彼女をよく見ることができる。身長からすると2歳～少し成長の遅い3歳児。肉が抉られ、どうやって逃げたのかも分からないほど。

「・・・・・・っ！」

宝石魔術で治療にかかりたいが、今は集中できる場所でもない。ここはいったん身を隠してから元の世界に戻る必要がある。

「遠坂。早く治療してやれ」

怒気を纏った士郎が城を睨む。投影魔術で聖蓋布と黒塗りのハンターボウを取り出す。鷹の目はここからでは見えないあの城の人々に向けて殺気を飛ばしているのだろう。

「はいはい、全く。ようやく大師父の宿題が進歩したかと思えば修羅場なんて。どうせ士郎の幸運値が低いせいだわ」

「う・・・・・関係ないだろ」

だから私は未熟にも冷静さを失った士郎を宥める役目になった。アーチャーの遺言通り、何とか目を光らせて士郎を改善させている。だが根幹にある「正義の味方」に憧れ、ならなければいけないという脅迫概念を変えることは不可能だった。

今は大切な物を守れる、１０を助けて１を犠牲にするようなやり方は形を潜めているが、場合によっては実行する。

疫病の少女がいて感染率が高く、解毒の可能性がないと分かれば母親の手から少女を奪い、殺すことも厭わない。士郎は大切な物を守れるようにはなった。だが助けたいと思う人の中に大切な人がいなければ、彼は大勢の人を救うために動く。

相手がたとえ１０にも満たない子供であろうとも。足も動かない老人であろうとも。

後で後悔することになっても歩みは止めない。

徐々に壊れていく機械のように、人々の恨みや呪いを受けたとしても歩みだけは止めなかった。

「こんな小さな子を、くそ」

士郎の目の前には大勢の人が少女に向かって魔術を使った事実がある。

大勢は明確に悪であり、中傷じみた声や、笑い声からも少女を無抵抗なまでに殺そうとしたろくでもない奴らの顔が浮かんでくる。

しかし、少女は士郎の大切な人ではない。

そしてここにはどうしても殺さなければならない人はいないのだ。

「士郎。落ち着きなさい。これでも、私だって腹が立ってるのよ」

士郎は争いを好まないだろう。だが、私はこんなにこの子を痛めつけた相手に一太刀浴びせないと気が済まない。猫かぶった顔の下では未だに感情のコントロールとは裏腹に精神は未熟なままなのだ。

「・・・・・・分かった」

「なら、盾となって。私はこの子を看なくちゃいけない」

「適材適所だな。よし。俺は二人を傷つけさせやしない。何人たりとも、絶対に攻撃させない」

士郎の頭が少しでも冷静になったところで、私は傷だらけの少女にようやっと向かい合うことができた。

血の消費が激しい。ほぼ半死半生に近い。瀕死状態でとてもじゃないが動くことも難しいし、動かせば体力を消費して事切れるかも

しれない。

はっきり言ってまずい。既存の宝石魔術で治癒に向いた物はあるが、いかんせん士郎用に取っていた物なので全力解放で治してしまうとそれがスイッチになってしまう可能性もあるし、魔力酔いになる可能性もある。

特にこのことが原因で眠っている魔術回路が起動するのは、この子の人生を変えてしまうかもしれない。

「・・・・・・内部の損壊が激しいわね」

だが、今は緊急事態だ。そんな悠長なこと言っている暇もない。

即決と直感が頼りなのだ。サファイアを取り出し、魔力を流す。胸の部分、なにやら臭気を放つ物を剥ぎ、胸を晒す。肌に直接あてて治療を行う。必要最低限しかできないために、骨の修復は不可能でも止血と生命維持に用いればいい。

後は病院の仕事と丸投げしたいのだが、何かいやな予感がする。

そもそも、このような未発達な土地の未発達な場所で病院などあるのだろうか。

道路の整備もされていないような昔。まるで教科書で習う中世のような景色。感動よりも先に焦りがでた。

ここでは十分な治療はできない。つまりは元の世界に帰らなければいけないわけだが、座標軸もなにもなしにどうやって適当につなげばいいのだろうか。

次元を開けた場所は遠すぎるが、そこから逆算して次元を越える方が安全だ。この世界の魔術に興味が尽きないが、いたしかたない。

あらかた治療を終え、決心する。

この子を私たちの世界につれていく。放っておくのも無責任だし、関わってしまった者の責任という奴だ。

心の贅肉だとは分かっていてもなかなか割り切れない。

・・・・・・。なにこれ。辺りの大源が急速に集まりだした？

「・・・・・・って、この子、まずいわよ！　士郎！　早く終わらせないとこの子、死んじゃうわ！　この子を今すぐ抱えて戦線離脱！！」

目の前の少女を中心に大源が溢れだしている。あり得ない。世界の魔力を個人レベルで使うには魔術回路を通して生成しなければいけない。

例外としてセイバーのように魔力炉心があれば自力で魔力を生成できるが、これはそんなレベルじゃない。

明らかに魔力を吸い上げて、体を通して垂れ流しにしている。空間を埋め尽くす大量の大源。先ほど宝石剣で放ったものと大差ないほどの濃密なもの。

なんてデタラメ！？

でもこの子自身に魔力の制御ができていない。逆に異物が入っているかのように体は拒絶を示している。このままでは魔力暴走を引き起こす。

「一端、引くわ。元の世界でしか無理ね。ここは大源が多すぎる」

確かめるように呟いた。まずは辺りの大源をどこかにやらなければいけない。

「ち・・・・・・っ、分かった。遠坂、最後にでかいの、かましてやれ！」

士郎の言葉に頷く。どうせ大源を使わなければいけないのだ。殺人はしないつもりだが、城を破損するくらいならこの子を痛めつけた対価と釣りあうでしょう。

「ＯＫ！　いっくわよー！！」

宝石剣を構え、七色の極光を放った。辺りの大源を一気に消費する。少女の呼吸は安らかなものとなるが、一寸後にはまた大源が少なからず集まってくる。

士郎に少女を抱えさせて足を強化する。士郎は私と少女を気遣いながら走り、元の場所へと急ぐ。私も息を切らしながら到達した。

「遠坂、早く！」

「分か・・・・・・って、い、いるわ、よ！　息ぐらい整えさせて・・・・・・」

体力バカめ。心の中で毒づく。

さっさと息を整えると宝石剣を構える。わずかに時空が歪んだ後は残っていた。そこにあわせるように宝石剣を突き刺し、次元の扉を私たちの部屋に繋げる。

「よし！　安定したわ！」

我ながら完璧な出来だった。無理矢理開けただけだが、ちゃんと元の私たちがいた世界だとわかる。何せ先ほどは切れかかっていたセイバーとのレイラインがつながったからだ。

「いくわよ」

そして元の世界に帰ってきた。士郎は背中に少女を担ぎ、荒い息を繰り返す彼女をベッドに横たえさせる。

「・・・・・・はぁ」

思わずため息をつく。これから起こるかもしれないセイバーの言及やこの子の説明。そして大源を直接取り込めることが可能な少女だということを時計塔にいかに隠すか。

「ため息をつくと幸せが逃げるぞ」

皮肉だろうか。数時間前と同じ言葉を士郎は言う。

「バカね。ため息がつくから幸せが逃げるんじゃなくて、幸せじゃないからため息をつくのよ」

だから、私は少し疲れた声で同じ答えを示した。

運命邂逅　1（後書き）

士郎、凛の登場。

例に漏れず、原因は遠坂さんのうっかりです。

運命邂逅　2（前書き）

いきなり独自設定を導入します。

修正

青崎→蒼崎

運命邂逅　2

緩やかに景色は停滞していた。

時間が遅いのだろうか、自分の動きがゆっくりで心臓の音さえ平常時よりやや遅い。

そこには誰もいなかった。ただそこに在るだけの空間。

優しい光に包まれた、ぬるい空気を纏う。

嫌ではない。

むしろ心地いいと感じてしまうほど。

歩いてみるがやはり何もない。

少しだけ頭に『死後の世界』という考えがよぎるが、それはない。

こうして心臓は動いているのだから。

だから、これは夢なのだ。

そう結論付いてしまってからは周りの景色をやっと直視できた。

私の所以外には当たっていなかった光が辺りを照らす。

水と光の王宮。

王宮からは水が流れ、その世界は水浸しだった。
太陽は水に反射し、青い空は雲すらない快晴。
水は透き通り、光を反射している。
きらきらと水の中は宝石のように光り出す。
綺麗だなと思ったのは一瞬だった。
すぐに私が立っている場所が水しかないことに思いつく。
急激に戻る重力に引かれ、私は水に落ちた。
柔らかい水はまるで無重力のように私を包み込む。
息ができない。
口を、喉を通して入ってくる水は温かかった。
その水に包まれている私は、なぜだか幸福感に包まれる。
水が血と混ざりあう感覚。
眠気に誘われるままに瞼は閉じられた。
Ｒｕｔｅ　１－１
夢から覚める。

目の前に写ったのは石造りのどこかの部屋だった。ここがどこだと思う前に、助かったと安堵する。

部屋には見たことのない物がいっぱいあった。緑色の液体が入った透明感のあるガラス。

それは5本立てかけられていて、紫、黒、黄、青と、、見るからに危なそうな物だった。

触らないに越したことはない。

ベッドのそばには誰かいた。腕を枕に布団に顔を埋めている。

助けてくれたあの黒髪の女の人か赤銅の髪の人だろうか、とも思ったが、一目で違うと分かった。

少しの落胆に見舞われるが、目の前の金髪の・・・・・・体つきからは女の子。

１４歳ほど年上の、だらしなく寝言をいいながら睡眠を取る彼女を起こしていいものかためらう。

「・・・・・・ふふ、士郎。このように料理を作っていただいて恐縮なのですが・・・・・・」

幸せそうな顔で眠る彼女を、今起こせば大惨事に繋がりかけないと在るはずのない直感が告げる。

「・・・・・・いいでしょう。私の舌を満足させるには祖国の味は

不味すぎる」

切実な声が聞こえた気がした。

「・・・・・私の箸に、着いてこれますか？　いいでしょう。我が全霊を以て挑みます・・・・・・」

本当に寝言だろうか。一方的な最後通牒を残し、彼女はまた深く睡眠の世界へと入っていく。

「・・・・・・痛っ・・・・・・」

不意に、腕に痛みを感じた。

ゴーレムの投石が当たった方の腕だ。

何かで固定されていて自由に動かせない。

包帯を巻かれていることから誰かが治療してくれたのだろうが、その誰かはここにはいない。

年のせいか、筋肉は未発達。

あの逃走劇で見事に筋肉痛を起こしていた。やはり3歳児にあのようなオーバースペックを求める方がおかしいのだろう。

筋肉が断線していなくてほっとした。しばらく動かない方が賢明というもの。

一度起きあがってみたものの、またベッドに背中を預けた。

近くに在った水差しから水を喉に流し込む。

幾分か気分が落ち着いてきた。

なにやら、安全だと分かったのかまた眠気が襲ってくる。

瞼を重く引っ張るそれに負け、いつの間にか意識は睡眠慾に埋もれていく。

今度は、いい夢が見れますように。

ただ今の幸福だけをかみしめ、眠りについた。

ＳＩＤＥ　ゼルレッチ

遠坂の末裔が、やはり衛宮の倅の投影魔術で魔法に一歩足がかった。

ようやく考えが追いついたようで安心する。

あの家系は重要なことを見逃す傾向がある。

衛宮の倅の魔術は掛け値なしに強力なものだ。

それこそ、やはり大禁術に手を伸ばすほどに。

そして戦闘技能も磨けば光る。

蒼崎や真祖の姫には及ばないだろうが、やはり老婆心でも働いて

いるのか、なにかと気にかかってしまうのも事実。

そして昨日。

別の世界で在ったがどこかに次元の歪みを感じた。

遠坂だろうか・・・・・・と次元が開いた世界に次元を繋げると、ちょうどおもしろい者を担いで遠坂は帰ってきた。

「・・・・・・はぇ！？　だ、あ、大師父！？」

素っ頓狂な声を上げる遠坂。

うむ、やはり小奴はからかいがいのある小娘だ。

そして士郎に目を向ける。

投影魔術の使い手。

正義の味方を目指す愚か者。

それでも無骨ながら理想を目指す姿は美しい。

儂などが介入するまでもなく、奴は自分の曲げることなどしないだろう。

その背中、儂は歓喜に震えた。

半死半生の少女は、そこにいるだけで他の魔術師にはない存在感があった。

間違いない。

全く、小奴らの周りには異常なことしか起こらないのではないだろうか。

だが観察している分はおもしろければおもしろいほどいい。

「遠坂、衛宮よ。その少女、どうした？」

「え・・・・・・あ、えと、大師父の宝石剣で別世界で攻撃を受けていたところを保護しました・・・・・・」

なにやら歯切れが悪い物言いだが、別になにかやらかした訳ではない。

それよりももう一度その少女を観察する。

微弱な小源と膨大な大源を纏うそれは、やはり伝承にしか存在し得ない者だった。

「ほう、竜人か。生きている姿を見るのは初めてかの」

竜人。

世界との契約を交わしたわけではないのに霊脈、竜脈から大源を吸収できる者を指す。

アインツベルンが世界に出る前は、聖杯戦争は彼らによって成り立っていた。

在る者は御子。

在る者は魔術師の息子。

在る者は人外の異形。

先天的なものでしかなく、生まれ持っての才能でしかない。

すぐに世間とは隔離され、魔術師によって研究の対象となり老衰を迎えることができた竜人は一人もいない。

強力な魔力タンク。

それは魔術師にとって喉から手が出るほど欲しいものだ。

故に聖杯の入れ物として非人道的な処置を施された後は聖杯の器とされていた。

竜人とは端的に言えば魔力を汲み上げる貯水タンク。

個人で使うことさえ難しい魔力を自身の小源で無理矢理制御する。

故に自身が竜人であると気がつかなければ魔術はおろか、魔力も感じ取れない。

汲み上げる魔力が濃厚かつ膨大なため、魔術師の家系に生まれたとしても落ちこぼれ扱いを受けるだろう。

親ですら自身の子供が竜人であれば魔力を感知できないのだから。

「クラスでいうと、キャスターか。なるほどなるほど、やはり愉快だ。おもしろい」

「あの、大師父？」

「どうしたんだ、爺さん」

二人はこちらを気遣うように声をかけるが、今はそれよりも竜人に意識が向いている。

虫の息、そして僅かばかりの応急処置しか施されていないそれは、やはり子供故に、そして傷が深いために、竜脈から溢れ出る大源を吸収しては吐き出すサイクルを繰り返す。

息をするのも厳しいのか。

その苦しみから逃れさす為に頭に魔力を送る。

脳の中の神経を魔力で無理矢理統制させるためだ。

「・・・・・・はぁ・・・・・・・グ、・・・・・・・ぅ、ふ・・・・・・・」

やはり予感は的中した。

小娘の中を暴れ狂っていた魔力は儂の魔力によって押さえつけられ、徐々に鎮静化していく。

それにしても、やはりおもしろい。

衛宮の小倅と同じ。

いや、それ以上のモノを内側に内包するか。

楽しみはつきぬ。

「・・・・・さて。遠坂よ、今回のことは大儀であった。まさか竜人をみる日がこようとはな。小娘のことで困ったことがあれば、いつでも儂は力になろうぞ」

「ありがとうございます。大師父」

「うむ。ではな」

次元に門を開ける。

その先はただ深い闇に包まれているだけだ。

躊躇もなく儂はその中に入った。

いつか顕現するであろう竜人の末裔。

未来に大成するであろうその姿に口が歪むのを感じながら。

運命邂逅　2（後書き）

ゼル爺登場。そしてセイバーの切実な寝言はイギリスに喧嘩売ってる訳じゃありません。断じて。そう、だんじ（ｒｙ

運命邂逅　3（前書き）

時間跳躍！　そしてまたもや独自設定！

運命邂逅　3

私、セリム＝アルハインツは魔術師だ。

ようやく五歳になり、義父と義母からは魔術を、セイバーからは剣術を学んでいる。

たまに次元を切り裂いて登場する義曾祖父？　は、良くも悪くも私に影響を与えてくれる人となった。

「義父、少しよろしいですか？」

「ぅお？　どうした、セリム。投影魔術は諦めたんじゃなかったのか？」

意地の悪い質問だ。

絶対に義母の影響を受けているではないか。

そんなことは微塵も感じていない義父は純朴そうな顔をこちらに向けて、手の動きを止めた。

ちなみに今は鑑定職に就いていて真贋を見極める仕事に就いている。

しかし、残念ながらその給与のほとんどは義母と私の宝石魔術の材料に当てられる。

「投影の基本は学びましたが、やはり義母の言うとおり合いません。

なのでこの前お会いした人に教わった方法を試してみるつもりです」

とたんに義父は微妙な顔をする。

まあ、自分がいつか敵対するかもしれない相手からの技術を義理とはいえ娘が用いるのに抵抗を感じているのかもしれない。

義父は今、教会から不信の目で見られている。

故に教会サイドは事実確認のために戦闘員とも言える代行者を送り、数日監視を行っている真っ最中だ。

今は士郎特性カレーで足止めしているが、セイバーとシエルという大食いにかかればそれほど時間をかけずともなくなってしまうだろう。

その代行者はシエルという聖典持ちの蒼いカソックを着た女性だ。

セイバーとの稽古中、魔術鍛錬中、監視の名目で義父に着いていたため、自然と私が目に入ったそうだ。

投影魔術という無駄な技術を学ぶ私。

筋力が未発達なのに剣術に傾倒する私。

そしてゼル爺達しか知らない私の秘密。

私は竜人だ。

世界との契約なしに世界の魔力を行使する異端だ。

故に、世界と私は対等であり、ゼル爺には予言めいたことも言われている。

いつか私はこの身に固有結界を宿す。

私という世界の中身が顕現する。

シエルにバレたのは私が竜人だと言うこと。

情報ソースはわからないが。

だが今はまだ発現していない。

シエルは何もみなかったことにするらしい。

頭の固い教会の中では比較的珍しい人柄のようだ。

もしかしたら士郎がカレーで釣ったのかもしれないが。

「うん。シエルさんが言ってた黒鍵。その投擲術と式典各種を学ぼうかと・・・・・・」

私は義父のような投影は不可能だ。

せいぜい数三十数秒展開できるかどうかの微妙な魔術。

そしてそのような無茶な投影を実体として結ぶという点では義父は本当に人間だろうかと疑ってしまうほど規格外だ。

かつては宝具すらも投影できていたらしい。今は緊急事態でなければ投影しないが。

だが、私ではそこまで投影魔術を極めることは不可能だ。

なので使い捨てできるモノに焦点を絞った結果がこれだった。

投影した黒鍵での式典付与。投擲するものとしては適任のものだ。

義父のようにみただけで解析できるというものでもないが、馴染めば早いだろう。

「まあ、いいんじゃないか？」

二つ返事で納得する義父。

実用性は納得できる物だったのか、案外簡単に決まってほっと息を吐く。

反対されたときのことを考えていたので、これでスムーズにいくかもしれない。

「ただし、遠坂への説得は自分でするんだぞ」

・・・・・・、義父は中ボスであった。ここから義母というラスボスを説得するには骨が折れそうだ。

Ｒｕｔｅ　１－２

「・・・・・・はあ、私にですか？」

困ったような顔を浮かべるシエル。

母と思わぬ伏兵、セイバーによって反対されたが、何とか勝利を勝ち取ることができた。

特にセイバーは『自分から学んだ剣術に自信が持てないとでも言うつもりか？』と冷ややかな怒りを発していたので今夜の鍛錬が恐ろしくて仕方ない。

「ねえ、シエル、教えて？」

「・・・・・・、まあ、聖堂教会の魔術とは認められていない代行者特有の異端の技術なので教えるとなっても別に問題はないとは思いますが・・・・・・」

ちらとこちらを見る。主に筋肉。そして首を横に振る。

「残念ながら、投擲する黒鍵はあなたのような幼子が扱えるほど軽くはありません。故に断らせて・・・・・・」

「大丈夫ですよ。ようは筋肉さえ足りてればいいわけですから」

ごそごそとゼル爺からもらった甘くないあめ玉（のような形状のモノ）を取り出す。

それを訝しそうにシエルは見てくるが、説明もなくいきなり私はそれを飲み込む。

どうせセイバーとの鍛錬もあるし、本当の体よりはある程度成長した体で反射等を鍛えた方が有意義だということで、筋肉が付かない割に技術だけを学べるということを可能にした魔法薬だ。

名前は・・・・・年齢詐称薬？

ゼル爺が異世界で買ってきたモノの中では比較的マシな部類に入る。

効果は一定時間、はっきりと示すなら満月が輝く日にはリセットされる。

中にはウンディーネの涙という超ド級の魔術媒体が使われていて、この世界での魔術師に売るとなれば原価だけで８桁を越えるという代物。

義母には伝えるなというお達しは重々承知している。

飲むと体は実年齢から１０歳プラスしてまで成長し、目線も高くなり、周りの人たちにも私が大きくなったように見せるが、結構効果は単純である。

認識の誤差を利用するのだだ。

個人を認めるには他人と自分という二通りの観測者が存在する。

故にその両方が観測した結果が『成長した自分』だというなら世界はそれを了承しなければいけない。

一種の暗示を越えた世界規模でのことだ。

異世界では常用こそされていないものの、市販として出回っている。

なお、これと同じモノを用意するのには第一魔法か第五魔法を極めるしかない。

特に第五魔法を扱えるようになれば、これと同じようなことは一応可能である。

ただ、第五魔法の方法は未来と過去の自分を無理矢理に呼び出すという乱暴な方法ではあるが。

「・・・・・・」

「・・・・・・私はなにも見ていません」

「賢明な判断、ありがとうございます」

説明したのはこのためだ。

私からこれを押収しても大師父が定期的に補充にくるし、教会でも義父母と爺さんが私をかわいがっていることはリークしているはず。

虎の威を借る狐で申し訳ないが、利用できるモノは利用するのが私の流儀だ。

だってそうしなければ、いつか私は死んでしまうかもしれないのだ。

私はおぼろげな記憶の中でハルケギニアでの家を覚えている。

恐怖からくる焦りと、強くなれない掻痒がない交ぜとなっている。

私は本来、ハルケギニアでの住人であってここにいるべきではない。

つまり、世界の修正が私に働きかける前に、私はハルケギニアに帰らなければいけない。

あそこは中世のヨーロッパの技術力と、傾倒しすぎた魔法文化しかない。それは、メイジであっても貴族ではない私には辛すぎる。

ハルケギニア式の魔法は使えない。

私にはそれを使う才能がなかった。

あちらの魔法を見よう見まねで行っても、魔力は爆発しか起こさない。義父には驚かれたが、工房がめちゃくちゃになるため使用は控えている。

だから、一つでも多く、生き残る為の手段が欲しい。

「まあ、仕方ないでしょう。教会側としては、貴方たちにキシュア・ゼルレッチの背後関係が明らかになったとでも伝えておけば、どうせ鵜呑みにするでしょうし」

一部問題発言も出たが私は無視する。ギブアンドテイクって奴だ。

「では鉄甲作用から。修得具合を見ながら火葬、土葬、風葬、水葬式典へと教えていきます。何か質問は？」

「シエルの魔術特性はどれに当たるの？」

「私ですか？　まあ、いろいろあって雷や火に特性が強いですが、本来であれば空です」

「空？　空葬式典なんてあるの？」

「ありませんよ。鳥葬ならありますが。それに、空は本来であれば何かを『カラ』にする事に特化した属性です。自分をカラにすることで戦闘機械として成立することも可能ですし」

シエルというのはフランス語で確か『空』を意味する言葉であるし、彼女の本来の名は別物でシエルというのは洗礼名であるらしい。

弓を関する埋葬機関第七位。

その魔術というのは持って生まれた物なのだろうか、それとも、教会が彼女に付与した物なのかはわからない。

「ま、こんな使えない魔術いりませんけどね。実践で役に立ちませんし、制御に失敗すると、私自身が悲惨なことになります」

極めて明るく、彼女はそういった。

「さて、ではとっととやりますか」

「ええ、では。何度か実演してください。それだけで十分ですので」

訝しそうにしながらもシエルは魔術行使を始めた。

その一挙一動を、私はそばでじっくりと観察させてもらった。

運命邂逅　3（後書き）

先輩登場。

年齢詐称薬はネギまのあれです。

運命邂逅　４（前書き）

主人公のチート魔術登場。

おそらく在り来たりです。

運命邂逅　４

シエルは教会から派遣されているのには二通りの密命がある。

一つは聖杯戦争で召還されたセイバーの調査。

反英雄であった場合は教会は代行者により滅却するつもりだったが、その懸念はもうない。

なぜならシエルが来た直後に聖剣を振り回しながら義父と私を追いかけ回すセイバーを見てしまったらしい。

黄金色に輝くそれから、紆余曲折ありセイバーの真名がアーサー王だと知れてしまった。

因みになぜ私と義父が追われていたかというと、セイバーに内緒でスイーツを食べていた。

クレープが売っていたのだが、アイスを入れるタイプで持ち帰ることができないと判断。

そのまま二人分だけ買って食べながら戻ったのだが、ちょうど外に出ていたセイバーとばったり。

クレープ。義父。私。そして自分の方を指さしたのだが、義父は首を横に振る。

首根っこを捕まれてそのまま道場でボコボコにされた。

このような犠牲の上にシエルが情報を得てしまったのだ。

後でセイバーにクレープを４つほど買った義父の土下座に、４つ目のクレープを食べながら仕方ないとばかりに許したのだ。

そしてもう一つは大師父の監視らしい。

そして大師父が何かと面倒を見ているらしい４人組、遠坂、衛宮、セイバー、そして私の調査もかねている。

聞けば大師父は死徒らしい。

だが命を長引かせる以外には吸血もしない、人もおそわない（おもしろい人物には例え真祖の姫君であっても手を出す）が、教会としては居ること自体が罪とのことで粛正に赴いていると言うところだが、シエルにその気がないため報告のみの保留となっている。

平行世界に逃げられれば教会側は手出しができないため、慎重にならざるを得ないと。

シエルは義父のカレーが大好きだ。

だからカレーを作ってあげれば大抵のことは聞いてくれる。

だからこそカレーを盾にして技術を学ぼうとした結果。

投擲を行ったシエルと同じ軌道を描き、対象物を貫く私の姿を見てシエルが床に倒れて泣いている。

それを同情でもしようものかと悩んでいる義父を後目に、セイバーもやはり少しあきれている。

私の魔術特性は異端も異端。

ただ自身の目で見た事柄を模倣し、『再現』することにだけ特化した。

だから義父の投影魔術も模倣できるはずだが固有結界から引っ張り出すということが私には再現できない。

故に３９秒だけ展開できる使い捨ての武器を創る魔術としか使えないのだけれど。

義母からは宝石魔術と流動魔術を教えてもらい、セイバーからは剣術を見せてもらっている。

真剣での実践を行ったことはないが、前のクレープ動乱（私命名）により何度かセイバーの攻撃（魔力放出あり）を防いだことから目を付けられている。

いつか、木刀から真剣に切り替わるのだろう。

そして今は、シエルの投擲技術と鉄板作用にかかる癖を模倣し、かみ砕き、反芻し、再現する。

それが私に許された魔術。

最適化した私の黒鍵は見事鉄製の厚い板をくり貫いた。

続いて火葬、風葬と行い、修得する。

土葬と水葬はシエル自体が苦手としているため、それほど威力は出なかった。

「・・・・・・私の努力が・・・・・・」

とかつぶやいているが、極力無視。

だってこれでセイバー、義父、義母に続いて四人目だもの。

さすがにゼル爺はむり。

私の再現魔術は一定期間以上行動を共にした相手、もしくは相手の技術を何回か観察することで再現を可能にする。

技術、魔術を模倣する。

しかし、ランクは下がるし完璧に模倣できない。それこそ自身よりも強いものにあえば模倣するまでもなく殺されてしまう。

初見殺しの義父とは違い、こっちは手札を事前にそろえなければいけない。

しかも練度も低くそうそう使えない。

ジョーカーも持っていない。

そんな私が慢心できる暇などないのだ。

あのハルケギニアの恐怖はそれほど根太く、私のトラウマとなっている。

手札を有効に切り、自分のペースを作っては要所要所でジョーカー足りえるものを切る。

私の戦いには強い手札が必要不可欠だ。

習ったものの練度を上げるが、これもまた難しい。

本来の担い手、使い手でないため、基礎がなっていない。

結果だけを追い求めているので過程がわからない。

公式を学んでいないのに答えだけ出る数学のようなもので、応用が利かないしそれ以上の効果を生み出すのは難しい。

結局は0に戻り、反芻しながら結果を強化していくしかない。

理解し、模倣し、再現していく。

ただその繰り返しを延々行い続けていく。

根源などに興味はないが、それが強くなるための、ジョーカーを上回る切り札だとしたら欲しい程度には考えているが。

そういう意味では私は魔術師ではなく魔術使いだ。

「シエル、あまり考えない方がいい」

「セイバーさん」

「セリムの魔術は、反則級だ。私の（魔力放出ありの出力の）剣戟すら真似しているのだ。魔力ブーストを保ったまま、相手に斬りかかるとなれば私でも対処が難しい。もっとも本人の経験が浅すぎるため、食らうようなヘマはしませんが・・・・・・」

義父は青い顔をしている。

「そのような『結果だけ』を再現する相手に条理など通用しません」

断言されるとそれはそれで悲しい。

うんうんと頷く義父を義母直伝のガンドで打ち抜きたい。

「シロウ、セリムが聖杯戦争に参加していなくてよかったですね。もしセリムが何らかのサーヴァントを使役していれば、もしそれがキャスターであったなら、神代の奇跡を扱う魔術師の誕生でした」

なんだかそれは惜しいような、そんな気がする。

でもそのキャスターというサーヴァントに女性的な危機を感じるのはなぜだろう。

こう、着せかえさせられるような、玩具にされるような気がしてならない。

忘れよう。

これはあったかも知れないＩＦの話だ。たられば の話なんだ。

「もういいです。確かに異端かも知れませんが、教会はセリムさんのことを詳しく調べろとは言っていませんし。私が深く追求することもありません」

疲れたように呟くとシエルは居住まいを正した。

「本調査はあなた方と宝石翁との関係、及び使役するサーヴァントの確認です。両方が成し得たということは私がここにいる意味はない。よってこれにて失礼します」

カソックをただし、その中に黒鍵をしまうとシエルはそんなことを言い出した。

確かに気がつけばたった４日だったが、監視のためかいつも側にいたから時間感覚が働いていなかったのかも知れない。

別れてしまうのが惜しいと思ってしまうのはダメなのだろうか。

義父はそっと頭を撫でる。

優しい笑みでこちらの心情を察しているのか何も言わなかった。

「あ、そうそう。何もこれが今生の別れというわけではありませんよ」

・・・・・。シエルは唐突に振り返ってそういった。

教会の代行者はあまり私用で出歩かないのでは？　とも思ったが、仕事さえやっていればどこに寄ろうとお咎めなしらしい。

事実、ほかの代行者も無断で勝手にどこかにいっている者も少なからずいる。

「士郎君のカレーの味は、まさにメシアンのカレーにも匹敵するほど。私の舌は一番のカレーを所望しています。なので、頻繁にカレーを食べにきますので、そこはご了承ください」

では！　と元気よくシエルは去っていった。その場に残された私たちは、しばらくポカンとしていた。

「・・・・・・あ、そうだ。年齢詐称薬『幼』を飲まないと」

そろそろ時計塔から義母が定期報告に来る。

今日は研究成果の発表とのことで気合いが入っていたが、どうなったのだろうか。

宝石魔術の家系は多く存在する。

その大本の師となるのがゼル爺だ。

たいそうな爺さんだと思っていたが、その実立派な爺さんだった。

その第二魔法を継得が家系に与えられた課題であり、時計塔でもその論文を発表しようものなら評価は高くなるだろう。

だが、あの義母のことだ。

いつものように大事な場面で空回りしてうっかりするのだろう。

「さて、義父よ。そろそろ準備をしよう」

「ああ。セイバー。大事なものとかあるか？　旅行鞄に詰めるぞ」

「ええ。大丈夫です。それにしても、今度はいったいどこにいくのでしょうか」

なぜ私たちがこのような未来予知を可能としているかはご想像にお任せするが、あえていうならこのようなことは過去に４件有ったということだけは伝えておく。

エーデルフェルトがしゃしゃり出てとか、あの教授頭が固すぎるとか、論文をそのまま忘れて出かけていったりだとか。

義母はすぐさまアパートに来た。怒り心頭といった、怒気を上回って逆に冷静となった無表情で部屋を見渡す。

「明日、日本に里帰り」

それだけ伝えると時計塔の自室に戻った。

セイバーの直感がついていくと危ないというので義父と私は赤い悪魔の癇癪につきあうことはできないと、その日はアパートのソファで寝た。

セイバーが布団代わりに暖めてくれたので多少は寒くなかったが、義父が慣れないセイバーの添い寝にノックアウト寸前であった。

翌日。

怒りが多少収まった義母が私たちの様子を見て義父にガンドを食らわせた。

さすがに私も可哀想になったが、言えばこちらまで飛び火するかもしれないので黙った。

運命邂逅　４（後書き）

再現するだけの魔術。

運命邂逅　5（前書き）

結構設定を考えるのは面白いです。

運命邂逅　5

空港から電車で数時間。

黙っていても注目を集めるセイバーと義母。

男たちの嫉妬を一身に浴びている義父に同情する。

ちなみに私は義父の膝の上でお菓子を食べている。

別に義母の隣が怖かったとか触らぬ神に祟り無しだとか思っていない。

ひしひしと緊張が伝わってくるのだ。

義母は妹と仲はいいが軋轢があるという矛盾した説明を受けている。

本来は姉妹なのに性格の不一致やら妹の黒化やら義母のツンデレやらでまともな会話につながらないらしい。

義母の妹は桜というらしい。

会ったことはないが、何度か聞いたことがある名前だ。

桜は姉に羨望と同時に嫉妬を抱き、義母は妹に罪悪感と義務が綯い交ぜになった状態。

それでも義父が緩衝材となっている模様。

時たま義父が起爆材足り得ることも少なくはないが。

セイバーの考察はこんなところだ。

「さあ、ついたぞ」

武家屋敷というのだろうか。

事実、日本でも珍しい暖かみがある木造住宅であった。

衛宮の表札には未だに切嗣と士郎という名前が残っている。

切嗣とは士郎の父親代わりだったらしい。

それを感傷深く撫でた後、玄関のチャイムを鳴らす。

パタパタとスリッパの擦れる音とともに、誰かが玄関に駆け寄ってきた。

「どちらさまでしょうか？」

そういって現れたのは、紫色の髪とセイバーと私と義母の胸を足したような爆乳娘がそこにいた。

思わずうなる。

あれはいったいどんな原理でたわわに実ったのか。

身体的特徴を再現できる魔術ではないのが悔やまれる。

「・・・・・・先輩？」

「や、桜。数年ぶりか？」

「先輩！！」

まるで待ちこがれた恋人の再会のシーンみたいだ。

といっても、女性陣はおもしろくない。

義母はもちろん、セイバーですらちょっとイラッときている。

目に入っていないのか、それともただ単にいない者としているのか。

まあ数年ぶりの再会なのでそこまで目くじらを立てなくてもいいのではないだろうか。

「桜、お客さんですか？」

奥から、これまたナイスバディな紫色の髪をした女性がでてきた。

眼鏡とGパン。

黒いTシャツと、ずいぶんラフな格好をしている。

「ライダーか。久しいな」

「セイバーですか。それに凛と士郎も。お久しぶりです」

桜の痴態が目に入っていないのか、ライダーは全く動じずに礼をする。

そして私の気配を感じたのか、目線を下げてきた。

感情がコロコロ入れ替わっているようだ。

困惑、思考、判断。そしてセイバーの方に顔を向け、言い放った。

「この子はセイバーと士郎の子供ですか？」

空気が凍ったのは、おそらく近くを通りかかった一般人ですらわかったのではないだろうか。

確かに私の年だと誰かの子供だと間違えられても無理はない。

そしていわゆる日本人ぽくない顔と、セイバーの容姿に少なからず近づいてきてきたのもライダーの結論を助長することとなったのではないだろうか。

確かに義母と義父の子供には見えないだろう。

遺伝が違う。

銀髪など外国の因子が入っていなければ出るはずなどない。

ただ。

私はみた。

『子供ですか』発言の後、こちらをまるで穴があくように見つめる彼女の姿を。

身の危険をすぐさま感じ、義父に駆け寄ろうとするが彼女はその義父の側にいる。

ならばとセイバーの元へと駆け寄った。

普段ぐーたらしてても剣を担う英霊の一角だ。

窮地になったら仲間を守ってくれるはずだと。

「ま、待ちなさい、ライダー！　それは大きな誤解だ！」

「何を恥ずかしがるのですか。男と女がいれば、子供は自然にできるというものです。そうでなければ士郎が旅先で作ってしまったのですか？」

絶句。

そういうにふさわしいだろう。

義父はもう動かない。

ギシギシと音を上げて締められる背中が痛ましい。

勝手に話を進められてセイバーも焦っている。

このようなセイバーを見るのは珍しい。

「ところで、ライダーと言うからにはあなたもサーヴァントですか？」

疑問を口にする。

話題転換の要素が強いが、ずっと気になっていた。

「ええ。桜の中に疑似聖杯が残ったままでしてね。私はそれにより現界としています」

「ふうん。じゃあさ。他のサーヴァントも呼べちゃったりするの？」

「・・・・・・どうでしょうか。聖杯としての機能は桜には有りますが、召還機としての機能はないかと」

なるほど。

だからライダーは現界しているにも関わらず桜が魔力不足で倒れることがないのか。

「それに、正直ライダーには助かってますよ。私の中で魔力が暴れて、サーヴァントを使役しておかないと際限なく増えていくので」

義父を締めながら桜は補足の説明を付け足す。

それは竜脈から再現なく魔力を引き出してしまう私と似た状態だということだろうか？　だとしたら慣れないとつらい。

「とりあえず家に入りましょう。このままじゃ休めるものも休めないわ」

義母がそう締めくくり、桜は名残惜しそうに義父を離す。

「・・・・・・それと、セリム。間違っても私と士郎のことを義母、義父とか呼ばないでよ？　桜の前でそれはタブーよ。凛と士郎。そう呼びなさい」

「・・・・・・じゃあセイバーがお母さん？」

「・・・・・・はあ。セイバーは普通にセイバー。分かったわね？　分かったと言いなさい」

「分かった」

「宜しい」

義母・・・・・・凛はそういうと私を解放して中に入る。

家主である士郎の意見をガン無視して進められる話に士郎が不憫に思った。

「大丈夫？　士郎」

「ああ。大丈夫。俺も何とかやっていくから・・・・・・」

そのまま消えてしまいそうな士郎と一緒に、衛宮邸へと入っていった。

「あら、いらっしゃい」
「おじゃましています。士郎」
中には男装の麗人とシスターがいた。教会のシスターさんだ。
「あんたたちが何でいるのか、聞いていい？」
顳かみに青筋を浮かべ、凜はそういった。
桜は後ろの方で苦笑い。
ライダーは我関せずと本を開いて適当な場所に座って呼んでいる。
先に声を上げたのはシスターさんだった。
「私は定期報告にきただけよ。セカンドオーナーがいないから、血筋的な後継者であるこの子に報告する義務が私には有るでしょう？」
人を食ったような笑みを浮かべ、シスターは答えた。
「そ。カレンの事情は分かったわ。それでバゼットは？」
「・・・・・・・・・・言いにくいのですか」
ちらりと士郎を見る。そして困った顔を凜に向けた。
どうやら、士郎にはあまり聞かれたくない類の話のようだ。
「ＯＫ。後で聞くわ。・・・・・じゃ、私部屋に戻って休んでる

から。時差ボケが厳しいようだったら士郎もセリムも寝ときなさいね。それじゃ・・・・・・」

大きな欠伸をしながら凛はでていった。確かに時差ボケはあるな。

士郎も少し電車の中で寝ていたが、安眠できたというわけではない。

だが、その前に風呂だ。

イギリスではなぜかお風呂ではなくシャワーしかないから士郎や凛に聞いたお風呂というものに興味がある。

「どうする、セリム」

士郎が今後の予定を聞いてくる。まあ初めて使うものだし、士郎に教えてもらうか。

「風呂に入る。いこうか、士郎」

士郎の手を取ってお風呂場に行こうとする。

しょうがないと士郎も腰を上げ、洗面台まで案内しようと立ち上がると１０の瞳がこちらを射抜いてきた。

ばっと居間に目を戻すと、セイバー、桜、ライダー、カレン、バゼットは信じられないかのような目をこちらに向けている。

「男女がともに風呂に入るなど、正気ですか？」

「ま、まさか、先輩ったらセリムちゃんといつもお風呂に入っているんですか！？」

「なんと。まさかセイバーからあのような奔放者が産まれるとは」

「まあ、お盛んなことね。猿のように励むのかしら」

「ふ、不潔です！　シロウ君！」

なんともまあ、士郎が糾弾されている。

詰めかける女性陣に士郎もどうしたものかと目を向ける。

一部ライダーの発言でセイバーから殺気が漏れたが、ライダーは澄ました顔をしている。

大物だと思った。

「みんな何か誤解しているようだが、私は士郎に風呂の使い方を教えてほしいだけなんだが？」

何せここに来るのは初めてだ。

間取りも知らない。

風呂の使い方も知らないでは話にもならない。

自分たちの妄想ともいえる考えを暴露したことでセイバー、並びに桜、バゼットは顔を赤くしているが、ライダーは普通、カレンは少し残念そうだった。

なぜに？

「士郎、みんなどうかしたのか？」

「残念だが俺には分からない」

鈍感タッグはそういうと居間からでていく。

中からため息が聞こえたのはそのすぐ後だった。

Ｒｕｔｅ　１－３

深夜。

士郎と一緒に誰が眠るかで揉めていたが、結局は私に落ち着いた。

誰かの服を持ってなければ安心して眠れないと言う困った性分なので今日も士郎に抱きついて寝ている。

その行動を恨めしそうに桜が見てきたが、セイバーも凛も慣れているのでスルー。

たまに彼女たちとも一緒に寝ているのだが、そのときにも抱きついていてふしだらな行為には見えなくなったのだろう。

「・・・・・・」

私は慣れない環境故か、それとも仮眠と称して４時間ほど寝たか。

どちらかの理由によって深夜に目が覚めた。

ついでにおしっこに行きたい。

ぶるりと震えるが、トイレの場所が分からない。

いや、正確に覚えていないだけなのでいつかはたどり着けるだろうが、夜中に動き回るのはこう、なんというか、怖いのだ。

以前、夜中に眼が冷めてしまった私は偶然見てしまった。凛の魔術師としての顔を。

能面のような無表情、そして魔術について本を広げる凛は格好よかった。

しかし、急ににへらっと笑ったかと思うとだらしない顔になり、引き締めたと思えば顔を真っ赤に染める。

そのような意味不明な行動に、なぜか恐怖を覚えたのだ。

起きていることがバレれば、ヤラレルと。

以来、早く寝るように心がけてはいるが、夜中に目を覚ましても歩きたくないのだ。

偶然あのヘブン状態の凛を見かけてしまったらガンドを打ち込まれそうで怖い。

凛は恥ずかしさを紛らわすために制御度外視のガンドを打つ。

効果は一週間の風邪だ。

余計なことに巻き込まれたくはない。

しかし、私の膀胱は待ってくれない。

女のプライドで庭にするのは避けたい。

なら隣で寝ている士郎を起こすのは仕方ないことなのである。そう、仕方ないことだった。

ゆっさゆっさと揺らすと、案外浅い眠りだったのか士郎はすぐに目を覚ました。

「・・・・・・どうかしたのか、セリム」

少し眠そうに起きあがると士郎はこちらに問いかける。

迫って来るものと膀胱の具合を考慮すれば、伝えるには早ければ早いほどいいと思う。

「おちっこ」

だから寝ぼけていたとかそんなことぶっ飛ばして用件を簡潔に述べた私は、後に羞恥に悶えることとなった。

このとき、もう少し考えていればと思ったことは後にも先にもない。

「分かった・・・・・・えと、トイレは廊下の突き当たりに・・・・・・」

「怖いから、ついてきて」

「・・・・・・・・・・・・・分かった」

なぜか笑いをかみ殺しながら、士郎は先導するように私の前を歩いていく。

「なにがそんなにおかしいの？」

「いや・・・・・・おまえは普段しっかりしているくせに、たまに子供に戻るんだなと思ってな」

「・・・・・・悪い？　しろーだって人のこと言えない」

「悪くはない。ああ、それが自然なことだ。本来ならお前はそうあるべきだったんだ。魔術なんて危険の伴う物に手を染めるんじゃなくてな」

士郎にだけは言われたくない。

危険な状態になっても、彼には成し遂げたい願いのためなら自らを切り捨てる。

それは壊れた人間だからこそできることだ。

衛宮士郎という人間も本来は魔術などと関わるべきでない。

人が助けたいなら消防士なりレスキュー隊なり、道だけなら無数にあった。

それを魔術しかないと思いこみ、または彼の命の恩人がそうであったように。

士郎は魔術でしか人を救うことはできないと思っている。

魔術が危険だというなら、士郎こそ手を染めるべきでない。

「まあ、いいんじゃないか。そんな道があっても。危険だからなんていったら、危険じゃないことの方が少ないだろうし、お前はまだ5歳、いや、もうすぐ6歳か。生きること、つまりは自衛の為の魔術だ」

「・・・・・・いつかハルケギニアに戻らなくちゃいけないからね」

「そうだな。あの世界は人に優しくない。だからこそ遠坂も俺も、お前を鍛えたんだ。すぐに戻してもお前は非力な女の子でしかなかったんだから」

むっと顔を歪ませる。

3歳児だった私に士郎はなにを求めているのだろう。

それは、確かに自我は有った。

言葉を話せた。

それだけだ。

魔法を放たれれば傷つくし、痛いのも嫌だ。

平和に暮らしたいから魔術を習うという矛盾した行動は自覚している。

だが、そこに生き残れる手段が有るのなら私は一つ残らず吸い込みたい。

その願いの、平和に暮らしたいという想いの、何処を否定できるというのか。

「力はただの暴力だ。それはどんな力であってもな。守るためには相手を傷つけなくてはいけない。それは平和を望むお前に誰かが恨みを持つと言うことだ。力はな、正義も悪もない。たったそれだけのことに気がつくのに、俺は9年もかかってしまったがな」

士郎は寂しい目をするだけだ。

力には責任がある。

士郎の力は剣を造ること。

剣とは守りの象徴でもあり、戦争の象徴でもある。

剣を交わらせば誰かが死ぬ。

衛宮士郎は、その傷ついた者も救おうとする。

幾つもの人を守れば、相手を不幸に晒してしまう。

それでも士郎は助けを与える。

平等に、均等に、貴賤なく。

一人を殺せば十人が助かるのなら、士郎は躊躇しない。

それが、数年前までの衛宮士郎だった。

「お前には力がある。だから見極めろ。お前の力が、分不相応ではないか。過ぎた力は身を滅ぼす。お前は確かに聡いが幼い。危ないと思えば逃げろ。分かったか？」

「言いたいことは分かってるけど」

「ならいい。勝手に突っ走られるよりはフォローしがいがある。まあ、俺が言えた義理じゃないか」

気がつくと、トイレは目の前だった。

士郎は壁に背中を預け、電気のスイッチを入れる。

「ほら、早くしないと漏らすぞ？」

「――――――！　デリカシーがなってないっ！　もうっ！」

バタンとドアを閉めてさっさと済ます。

まったくもう、士郎はいつもそうだ。

皮肉っぽいし意地悪だし、でも根は優しいことを知っている。

だから強くはでれない。

今でも凜を起こしたら般若の形相で「一人でいけ！」と言われるところを、わざわざついてきてくれるし待っていてくれるし、嫌な顔ひとつせずに物事を引き受けてくれるのは士郎の美徳だろう。

ちゃんと後始末を終えてドアをあける。

月を見上げながら士郎はやっぱり立っていた。

「ん、終わったか？」

「うん」

「そうか。じゃあ戻ろう。夜はまだ冷えるぞ」

そっと手を取る。

これだ。士郎はたまに、私を子供扱いしてくる。

凜も、セイバーも。

女性に対して甘いというか何というか、不安なときに、少しの優しさを分けてくれる。

手を握ったり、頭をなでたり。

最初は天然ジゴロかとも思ったが本当に天然で邪気がない。

故に拒むこともできずそのままだ。

女たらしめと言う言葉は、この家に住む男女比が如実に表されているだろう。

士郎という男一人に対して。

私、凜、セイバー、桜、ライダー、カレン、バゼットという、1：7の比率。

「士郎」

「ん？　何だ？」

「モゲろ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

男女比を見て私が口に出したのはそんな言葉だった。

この天然ハーレム野郎め。

凜だけでは満足しないと言うのか。

「なんでさ・・・・・・」

隣を歩く士郎は、肩をがっくり落としながらそう呟いた。

運命邂逅　5（後書き）

主人公はまだ子供の範疇ですが、考え方は大人に酷似しています。

運命邂逅　6（前書き）

士郎、私に任せてください。現状、わたし一人で十分対処できるかと。

今日のセイバーの名言集。

運命邂逅　6

ＳＩＤＥ　バゼット

就活に挑んで４年。

ランサーとの日々を想いながらも今日も今日とて就職活動だ。

これで記念すべき５００社目。

さすがに私も挫けそうになるが、一般社会に馴染むためには仕方のないことだ。

「ええっと、バゼットさん。ああ、外国の人ね。女の方・・・・・・」

面接官はまたもや男、そして私が女であるのになにが不満なのか。

やる気のなさそうな男とマンツーマン。

初めは性根を叩き直すつもりで拳を振るっていたが、さすがにいきなりそんなことはしない。

「大学はでてない・・・・・・ええと、失礼だけど特技の『格闘技』ってどんなの？　ほら、いろいろあるじゃん」

「種類など問いませんが、強いてあげればボクシングでしょうか」

「ボクシングね。強いの？」

「絡んできた悪漢を殴り倒すくらいでしょうか」

「・・・・・・ふうん。ちなみに何人くらいなら？」

「相手の質にもよりますが、４０人くらいなら」

・・・・・・。

よし。

これで完璧だ。

なにやらやる気のなさそうな男が急に怯えだしたが、やはり笑われたのが悔しくて机をバラバラにしたのが原因か。

しかし、他の優位性は男にも匹敵することはうまく伝えられたはず。

ここは普通の商社だが、性質の悪いクレーマー処理などに使われると私は見ている。

これなら合法的に敵をほふれる機会を得、さらに仕事もお金も手にはいる。

やはり拳を錆び付かせる訳にはいかないからな。

「あらあら、どうしたのバゼット。機嫌のよさそうな顔をして」

そんなことを思っているとカレンが来た。

確かに新都の商社であるから顔を合わせるのは普通なのか。

「あなた、まだ就職活動だったのね。プロボクサーでもなればいいのに」

「・・・・・・嫌みか？　目立つと魔術教会に捕まえられるだろう」

「あら、そうね。気がつかなかったわ。じゃあマスクを被れば？タイガーマスクみたいで面白いわよ」

こいつは本当に性格が悪い。

さすがはあの神父の娘というだけはある。

義手が疼く。

「ああ、それと一言いいかしら」

「・・・・・・何だ？　またやっかいごとを頼みにきたのか？」

「バイトよ、アルバイト。短時間で高額、少々命が危険にさらされるかもしれないぐらいでがたがた言わないで」

カレン・オルテンシアは教会からよく仕事を頼まれる。

もっとも、それはここに霊地があり、一番近いのが言峰教会でそこのシスターをしているのが目の前のこの人なんだが。

人使いが荒いのだ。

確かに手取り一日百万を越えるお金が手にはいるのはうれしい。

勤務中は長くて一ヶ月もあり、その間の弁当代も出るし、言うことはなかった。

ただその収入源が何処から来るのかを問うたとき、あろうことか銀行を指さし『あるところから持ってくるのが定石でしょう？』と呟いたのは今も忘れていない。

銀行員に暗示をかけ、綿密な行動のもとお金を引き出している。

その銀行員はお金を無断使用したとして逮捕されていたが、事実使っていたお金はせいぜい１００万。

だが銀行の損失は３億だ。

残り２億９９００万はいったい何処に消えたのか。

『これであなたも共犯者』

以来、カレンの手伝いは一切していなかった。

「やれやれ、頭の固い連中はこれだからいけないわ。流通が社会を潤わせるのよ。つまりは貯めるよりもこうして使ってあげる方がお金も喜んでくれるわ」

「不祥事が起こった銀行が取り潰されてもか？」

「これも報われない人の人助け。シスターに必要なのはただ人を導くことよ。それ以外、たとえ救われた人が警察に連れていかれても、バレなきゃその人は救われた自覚を持っているだけ。私が救う。私が殺す。それこそが私の在り方。ねえバゼット。そんなあなたは賢い人間でしょう？　ほら、お金よ？　必要じゃない？　さあ、少しお手伝いをしてくれないかしら？」

いやな目をするカレン。

私は金の亡者ではない。

確かにお金は食物を買う上で重要だが、別に金慾に捕らわれているわけでもなし。

「断らせていただく」

だからカレンの言い分は通らない。

「そう」

残念そうな声色だが、顔は被虐に富んでいた。

恐ろしい、そう思ってきびすを返し、カレンから距離をとる。

「残念、本当に残念ねバゼット。あなたは愚かな人間になってしまったのね」

「何とでも言え。私は堅実に働くぞ」

「次あうのが独房なんて、世界は残酷ね」

・・・・・・？　一瞬思考が止まってしまった。

「まあ、そうよね。私はお金で救われた人が警察に連れていかれても、バレなきゃいいんだもの」

その言葉の真意をはかりかねた。

カレンはなにが言いたいのか。

「ねえ、力を貸してくれないかしら。バゼット。国家権力の前にあなたを突き出すというのは少々残酷だと思うもの」

「・・・・・・カレン。なにが言いたいのか図りかねますが？」

「あの銀行員がそんな供述をしなければ私はお金をまるまる使えたのだけれど。でも2億９８００万の残りの行方を未だに警察は追っているのよ。だから、デコイが必要だとは思わない？」

２億９９００万では？　と思ったが、以前請け負った仕事・・・・・・一週間の教会護衛を思い出す。

紛れ込んだ死徒を追い返すというもの。

辛くも退け、１００万円を私は受け取った。

１００万。

それが意味するもの。

考えたくないことが頭に思いつき、顔から血の気が失せていった。

「貴様、私を脅迫するつもりか！？」

「脅迫なんて。歴とした仕事じゃない。ねえ、ビジネスパートナー？　いえ、相棒かしら？」

「ふざけるな！　そんな契約を交わした覚えは・・・・・・」

・・・・・契約をカレンは取り出した。

強制執行文書『ギアススクロール』。

魂に刻み込む類の、魔術的に絶対に逆らえない契約書としては最高位の物。

そこには自分の指紋が捺印代わりに押されている。

少し黒ずんでいるところをみると、まるでインクの付いた紙を押しつけて出来上がったような、そんな印象を与える。

私はそんな契約を交わした覚えは無かったが、頭に嫌なことが思い出された。

前日。

死徒を退ける際に交わした簡易契約。

その下にあれを仕込まれていたとも考えられる。

それよりも日本のビザを発行してもらう際にカレンを経由したあれか？

それとも身分証が使えないためにカレンを経由して入手したときか？

・・・・・・。

いや、機会は全部だ。

迂闊にカレンに頼った私の落ち度か。

はは、空が青いな。

「わかりました。まことに不本意だが、私は捕まりたくはない。契約を交わそう、カレン」

「ふふ、信じる者は救われるわ。さて、それで報酬と任務について・・・・・・そうね」

多少悩んだ後、カレンは思いついたように住宅街を指さした。

「シロウの家で話し合いましょう？」

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「・・・・・・・・・・・・」

トイレから戻る途中、何となく凛と桜が寝ている部屋をのぞくと、凛がいない。

少なくともトイレではない。

となるとまだ起きているのだろうか。

時計は深夜3時を指している。

魔術の最高潮に達するのは2時だと言っていたが、もしかして台所かな？

「どうかしたのか？」

士郎が私に声をかける。それほど重大なことでもないが。

「士郎、凜がいない」

「遠坂が？　・・・・・本当だ。桜しか・・・・・・、？　ん？ライダーもいない？」

「ライダーもこの部屋なの？」

「ライダーは桜のサーヴァントだからな。兄がいるけど、少し事情があって入院している。祖父も・・・・・・蒸発した」

蒸発のニュアンスがおかしかったが、それはいなくなったのか、士郎が消したのかがわからない。

桜が独りぼっちでライダーがそばにいるのは分かったが。

「気になるのなら明日に訊けばいいさ。今日はもう寝よう」

「・・・・・・分かった」

釈然としないまま布団に入る。

士郎と私は同じ部屋で寝る。

隣で士郎の温もりを感じながら、その日は寝た。

Ｒｕｔｅ　１－４

次の日、朝起きると7時を回っていた。士郎はもう起きているのか、台所から包丁を叩く音が聞こえてくる。

のそのそと布団から這いでると注射器を取り出す。モスキート注射なので痛くはないのだが、血を抜くときの脱力感が半端ではない。

巾着をポケットから出すと、血を並々抜き取った注射針から血を巾着の中にある宝石に垂らす。

これはオニキスだ。

しかし、中古の物で値段は凜のものより高くない。

宝石魔術は妥協できないと高価な物を凜は買う。

確かに通常魔力を通すには新品の方が通りやすい。

なぜなら魔術的処理を以前されている宝石もたまに市場にでるが、たいていそういう宝石にはレジストや呪いが働いている。

だからいくら凜だとしても解呪できないし、なにより他人の血がしみこんだ宝石など触りたくないとのこと。

私は逆だ。

中古で人を魅了したこと、魔術師に使われたことのある宝石の方が圧倒的に魔力を通しやすかった。

魔力を上書きするという荒技が可能で、私の魔力は『再現』する魔術に長けているので、宝石の傷なども多少修復することができる。

それに、呪いを包み込むように内包したり、他人の魔力を取り込んで解放する方が楽だ。

凜にいったらどつかれたが。

しかし私の宝石魔術は練度が高くない。

攻撃に使うならガンドの方が威力があるし経済的だ。

凜のように魔術刻印で受け継がれた物ではないために発動までに数十秒かかるが。

魅力的に見せ、人を惑わす宝石にする。

それを転売して利益を稼ぐのだ。

宝石自体には護符だとか魔除け程度の魔術式を組み込んで貴金属買い取り店に足を運ぶ物もしばしば。

士郎には話しているが、凛には話す機会がなかった。

生成も転売も凛が時計塔に行く間に行っていて、比較的時間が余ったときに、もしくは血が有り余っているときに定期的にやっている。

「・・・・・・んっ・・・・・・・」

私の血が宝石に垂れると、オニキスはより深い色合いを見せる。

先ほどまではひんやりとした表面が熱を持って脈動しているかのように熱くなる。

竜脈から取り上げている魔力は地下深くで生成される宝石にとっては相性のいいものだ。

マグマは地球の動脈であり、そこから宝石は生成される。

なら地球の魔力を用いた方が圧倒的にいいのだが、時には私の魔力に耐えられなかった宝石が暴発する。

端的に言ってしまえば、内側から破裂して粉々になる。

純度とモース硬度、カラットによって魔力を抑えているが、オニキスは初めてだった。

徐々に徐々に込めていき、慣れさせる必要がある。

「熱は収まったけど・・・・・・」

パタパタとそれを持ち上げて士郎の元へ歩く。

士郎は予想通り台所で調理を行っていた、その隣には桜がいて、居間ではライダーが本を読んでいる。

桜は何か楽しそうだ。

士郎も久しぶりに会った人に会話を弾ませている。

邪魔するのも悪いので、オニキスはまた巾着の中にいれ、ポケットにしまった。

宝石の解析を士郎にお願いしたかったが、こればっかりは仕方ない。

桜からまた睨まれるのもイヤだし。

私も居間に向かう。

ライダーがこちらに気づいたようだが、初めて会話を交わす私をどう接していいか分からない様子。

ちらちらとこちらを見てくる。視線を感じてライダーに振り向くと本を顔に押し当て、「私は本に集中しています」といった風を装っていた。

なんか、あわててるライダーってかわいいなぁ。

和んでいるとセイバーが居間にきた。
私服に着替えてほんのり汗をかいている。
ということは道場で素振りでもしていたのだろうか。
「おはよう、セイバー」
「おはようございます、セリム。今日は早いのですね」
「いつも寝坊するような言い方はやめて」
「きっかり１０時間以上寝ないと起きてこないセリムが言えたことではありません。・・・・・それにしても、ライダー。あなたはあなたで挙動不審ですがどうかしたのですか？」
急に話の矛先を向けられたライダーがあわてている。
「せ、セイバー。挙動不審などとは人聞きの悪い」
「いえ、客観的な意見なのですが。セリムがどうかしたのですか？」
「な、何でもありません。気にしないでください」
セイバーはライダーの態度に疑問符を浮かべながらも座った。綺麗な正座。
そして爛々とした目を台所の二人に向けている。

期待しているのだろう。

久しぶりの士郎の料理だし。カレー以外の。

さすがに４日三食カレーはセイバーでも辛かったらしい。しかもシエルに合わせた激辛カレー。

基本士郎はふらふらしている。

ゼル爺の頼みごとで急にどこかに行ったり凛の研究の手伝いをしたり、エーデルフェルト家で執事のバイトをしていたり鑑定士の実力を資格もなしにやり遂げる。

借りているアパートには士郎と私とセイバーが在住しているが、セイバーと士郎は凛の従者と言うことで時計塔に出入りできる。

しかし私は完璧な部外者である。

しかし、こちらの世界に連れてきてしまった責任を取ると言うことで住居を新しく登録したのだ。

セイバーの強い希望で道場が近くにあるアパートの一室。

クレープ動乱時には士郎とセイバーは凛が研究室『自室』に篭もるため、言い方が悪いが追い出されたらしい。

自主的に出てきたのだが。

部屋の空気は息が詰まるほどで、４日ほどアパートで一緒になった。

そのときにシエルもついてきたのだ。

というか、凛はシエルの存在が気になって研究に没頭できなかったらしく、士郎が連れ出す羽目になったというところが濃厚だが。

私は時には一人で魔術の練習を行ったり、士郎が来たときは投影を学び、セイバーが来たときは道場で剣術を見せてもらって素振りをしたり、凛が来たときは宝石魔術やガンドを学んだ。

最近ではシエルに投擲術と式典各種を学んだ。

よく人が入り浸るのはやはり心配してくれているのだろう。

まだ一桁の子供が一人暮らしなどあり得ないらしい。

少しは私も強くなっただろうか。考えているとセイバーが私に問いかけた。

「そういえば、セリムと昨日は鍛錬をしていませんね。お昼は道場で鍛錬でもしませんか？」

「そうだね。やろうか。木刀？」

「セリムはそれなりに動けるでしょう。多少手加減はしますが、実践に慣れていた方がいい。真剣で行いましょう」

回数の関係でセイバーの剣術を私はよく見ている。

それを反復、脳内で再生することで、セイバーの技術を『再現』

できることに気が付いた。

初めて再現したのがセイバーの剣術である。

凜は暫定的にそれを再現魔術と呼んだ。

それに肖って私は再現魔術と名乗っているが、認知度は低い。

むしろ認知されてしまえば終わり。

これは士郎の投影魔術と同じ珍しい属性であり、竜人である私くらい膨大な魔力公使ができなければ宝の持ち腐れとなる技法。

バレればホルマリン行きは確定。良くて監禁生活だ。

セイバーとの会話に花を咲かせていると士郎が来た。

手には数多くの和食。それが並べられる度にセイバーの目が輝く。

確かに豪勢な朝ご飯だ。

しかし、凜とバゼット、カレンが来ていない。

興奮するセイバーをなだめて、士郎は三人を呼びに行った。

だが、来たのは凜だけだ。どうかしたのだろうか？

「ねえ、凜。バゼットとカレンは？」

「そうですね。まだ寝ているのですか？　私が文字通り叩き起こし

ましょうか？」

セイバーが少し怖い。

凜ははっきりしないのか牛乳をがぶ飲みし、食卓に着くと答えを言った。

「あの二人なら、今朝早くに出ていったわ」

その言葉に、士郎は違和感を感じているようだ。

「あの傍若無人なカレンが帰るとは思えない」

それはそれでどうかと思うのだが。

しかし、教会の仕事もあるし、バゼットは就活で忙しいと言っていたし。

用事があったのなら仕方のないことだ。

「弱ったな。二人分余計に作っちまったぞ？」

「士郎、私に任せてください。現状、わたし一人で十分対処できるかと」

かっこいい暴食発言がセイバーから漏れる。

だがもうセイバーの顔に似合わない暴食ぶりは認知されているので私たちは納得して食卓に着く。

「いただきます」

ご飯を食べる。

セイバーの食指はついぞ止まることを知らなかった。

運命邂逅　6（後書き）

二人分ならセイバーは楽勝です。

運命邂逅　7（前書き）

セイバーとの鍛錬です。

運命邂逅　7

道場は静謐な雰囲気で包まれている。

完全武装したセイバーが、姿を現した黄金剣を構えている。

風王結界は解除してもらい、私の手には士郎が投影で作り上げたセイバーとほぼ同じ物を構えている。

士郎の強化でようやくセイバーの聖剣に迫るものとなったそれを掲げる。

凛は二度寝しているため、年齢詐称薬を飲んでも良かったため、今の姿はセイバーとほぼ同じ身長だ。

髪の毛は腰近くまで延び、セイバーからは『アイリスフィールのような』士郎からは『イリヤみたいな』髪だという。

自然法則に則り地面に向けてまっすぐ垂れる髪は、私の動きにあわせて軽く揺れた。

「準備はいいですね？　ここからは何でもありの戦法でもかまわない。だが、ガンドや宝石魔術、流動魔術は私には効きません。死角を狙いなさい。あなたの戦いは、私に勝つことではない。いかに私を翻弄できるかにかかっている」

確かに剣の英雄に剣で勝てるなどとは思っていない。

鍛錬とは私にとっては生存本能。

どうやれば生き残ることができるのかを常に考え、動き、敵の動きを封殺して有利にたつ。

私は私自身の戦いを行う。

それは剣で行うものではない。

「準備はいいよ。いつでも」

こちらを見つめる士郎とライダーにも緊張が走っているのか、じっとこちらを見ている。

セイバーは剣を構える。私も剣を。

真剣を構えたからには怪我することは覚悟の上。

死ぬようなことは極力ないとはいえ、セイバーはある程度の実力でかかってくる。

私が悪い動きを重ねれば、死ぬかもしれない。

緊張感が私を襲うが、心臓が跳ね上がるが、なぜか高揚していた。

セイバーの一挙一動は見たことがある。聖剣の構えから繰り出す斬戟を予想する。

数年のつきあいでみてきたセイバーの性格や行動、人となりを考え、策を見いだす。

「はあっ！！」

駆ける。

セイバーは一歩も動かない。

私のセイバーを模した攻撃は、胴に向かっての横薙だ。

しかし、セイバーは動くこともなく聖剣を当て、軌道を変える。

同じ剣を握っているのに、私の手はしびれた。

これが実践。

知識ではなく、本物の闘争だ。

子供のままならもしかしたら骨が折れていたかもしれない。それほど強力な攻撃であった。

「やはり模倣では、私の筋力までは追いつかないようですね」

涼しい顔でセイバーはそういう。

確かに私の魔術特性は技術だけを本物に近づける魔術。

筋力も攻撃方法もその場での判断も、幾多の戦場駆け抜けてきたセイバーの方が高いに決まっている。

「今度こそ！」

魔術回路を回して強化の魔術を用いる。

なければあるところから持ってくるのは魔術師の基本。補助系の魔術は投影よりも使える。

手と足に強化をかけ、セイバーの剣と拮抗した。

かのように見えたのも一瞬だった。

ぶつかった剣は火花を散らす。

私は必死に、セイバーは冷静に対応する。

すぐに弾かれる。

同じ剣でもやはりセイバーは担い手であり、私はただの使い手でしかない。

そんなことは百も承知だったはずだ。

だが、こうも簡単に受け取られてはやるせない。

魔力放出をしていても、私には一瞬だけの放出という器用な真似ができない。

セイバーは経験と直感から私の剣を受けた瞬間に最大出力に持っていくため、それでもこちらの分が悪い。

焦る私にセイバーは少しの落胆を見せた。

声には出さないが、それでも視線が語ってくる。

私は焦る頭を何とか落ち着かせるために脳に酸素を送る。

はあはあと、口元から聞こえる音は緊張から過呼吸になりつつある私の息だった。

落ち着け。落ち着け。

心を静める。

冷静になれ。

私の戦いは剣で戦う闘争ではない。

いかに勝利できるかというロジックを組み立てる策争だ。

相手を分析し、対処し、封殺する。

剣は手段でしかない。

頭を冷静に、呼吸を穏やかに。

気分が落ち着いてくる。

殺気を伴っている攻撃は私のトラウマである。

精神的な圧迫感をなんとか平常時にまで戻していると、セイバーが動かない私をどう思ったのか、一気に接近してきた。

「こないのならこちらから」

爆発的な突進力を伴ってセイバーは駆ける。

光輝く聖剣は私に一条の光を思わせた。

惚けている頭を冷やし、半ば反射のように剣を振りあげるとセイバーの聖剣が金属音をあげる。

そのまま踏み込まれ、防戦一方になる。

右から繰り出される剣線を左に流し、袈裟がけに放たれる剣戟を反らす。

ついていけるのが不思議なほど、剣は動いている。

与えられる力は間違いなく最強。

手も痺れてきているものを無理矢理に正していく。

一合二合三合と重ねていくごとに私の聖剣は欠けていく。

投影で作り出したものは総じて本物と比べ劣っている。

私と士郎の強化で保っていた均衡が崩れ始めたのだ。

聖剣と合わさること１２合。

よく持ったと思う。

セイバーの聖剣は、投影した聖剣を叩き割る。

そのままではセイバーも私を切り倒してしまうと判断したのか、急に体をひねった。

一回転した体で、そのまま蹴りを放つ。

お腹の中心から爆発するような音が聞こえ、道場の中を壁に向かって一直線に飛んでいった。

木がミシリと悲鳴を上げる。

背中から衝撃が叩きつけられたまま呼吸ができない。

セイバーは蹴ったそのままの姿勢を戻し、また最初の構えに戻った。

私は、セイバーに傷すら付けることができない。

セイバーの技術を模倣しているからもしかして一撃くらいはという甘い期待は有ったが、それも無理だ。息を整えながら規格外だと改めて感じる。

これが英霊。

人類の守護者。

なるほどせいぜい特異な魔術を扱う私程度では勝てない。

折れた聖剣は私ではどうすることもできない。
柄と途中までしかない金属片では考えるまでもなく使い物にならない。
なら戦法を変えるしか手段が残されてはいない。
聖剣に通していた魔力を止める。
霧散していくそれを、士郎が悲しそうに見ていた。
骨子だけとなった聖剣は、士郎が消す。
そして私が取り出したのは黒鍵。
指と指の間に展開し、四本片手に持つ。
シエルの走法を真似、足を強化して奔る。
セイバーに迫る勢いで周囲を回り、壁を駆けていく。
まず右手に持つ投影黒鍵を一発、鉄甲作用を付与して放つ。
空気を切り裂き、それは迷うことなくセイバーの心臓に向かって投擲される。
セイバーはそれを難なく弾くが、一射目のすぐ後にもう一度放った投影黒鍵がセイバーの死角をとらえる。
だが、直感と聖剣の前に両断され、霧散していく。

嘘だろう。

顔が青くなるのを感じる。

セイバーはシエルから及第点をもらった鉄甲作用付与の投影黒鍵を、剣術だけで弾いた。

ならばと、風葬術式込みの投擲を2つ放つ。

シエル直伝の投擲。

まっすぐに飛んでいったそれは、やはりセイバーによって弾かれる。

しかし、セイバーも少し驚いたような顔をしていた。

「なるほど。シエルはいい腕のようだ。劣化していても十分な驚異」

黒鍵が当たった瞬間、聖剣はブレた。

セイバーの筋力と風葬術式の威力がわずかに黒鍵の方が上回っていたようだ。

「・・・・・・、それって私は誉められてないよね？」

「他者の真似だけではセリムは至れないのです。それに、どうしても劣化している」

事実だ。

私と担い手の技術の間で生まれる摩擦はかなりの物。

もともと技術というのは人がアレンジしていく根幹にあるものであり、私が思いつく最適化は私の既存の知識から生み出される程度にすぎない。

想像力が乏しい私では、どうしても担い手のシエルのイメージが強いために、シエルのアレンジが入った黒鍵投擲術を行ってしまう。

セイバーもまた然り。

セイバーなど劣化した自らの模倣技術で倒されるわけがない。

「手札が多いのは結構だ。だが、磨かない剣ほど切れ味の悪い物はない」

「確かにね。これは再現することだけに拘っていた私のツケだ。痛いところを突かれてなにも言えない」

再現することで満足してしまった。

そこから改良を加えるには、労力がいる。いつの間にかそれを怠っていた自分に気がつく。

セイバーの剣術は基本である素振りを何度も行ったことで、剣という物を記憶の中のセイバーと同じように再現できるのである。

もちろん記憶は磨耗するし曖昧になる。それが劣化である。

「それが戦場では死に繋がるのです。さあ、もう一度構えなさい。あなたの聖剣は折れている。剣とは違う攻撃手段を見せてみなさい」

きついな。

確かに聖剣は折れた。

セイバーの聖剣に匹敵する投影など私には行えないし、魔術の類も効かない。

手詰まりだ。

けれど、このまま諦めるしかないのか・・・・・・。

・・・・・・いや、ここがハルケギニアなら、私は敵が強いからといって諦めて死ぬのか？

そんなの、認めない。

私は手札をそろえている。

諦めるのはジョーカーを出してからだ。

無いなら作る。

それが魔術師。

私はまだ戦える。

魔力切れなど起こさない私の体では、制限はない。

考えろ。

思考を止めるな。

セイバーを妥当する手段を。

魔術が脆弱すぎて効かないなら、ブーストをかければいい。

セイバーがCランク以下の魔術を無効化するというなら、Bランク相当を用いればいい。

用いるのは威力、貫通力、そして魔力。

「なら、ある物を利用するだけ！」

魔術回路をさらに回す。

スイッチが作られたことで分かったが、私には質のいい魔術回路が三本しか存在していない。

それだけを頼りに投影した黒鍵を構える。

セイバーがここで私を待たずに切り伏せれば戦場なら終わっている。

二つ目のスイッチを入れる。

水流が渦を起こすイメージ。

そして私の体に、隅々まで魔力が行き渡る。

私は竜脈対策に二つのスイッチが存在する。

通常状態のスイッチは水が波紋を起こすイメージで起動する。

フィルターの役割が強く、竜脈の干渉を制限するためのスイッチだ。

その一つ目が起動している状態で二つ目を起動する。

私が用いていた先ほどの雀の涙ほどの魔力とは比較もできない魔力が渦巻く。

だが魔力を無尽蔵に生み出す竜人にも欠点がある。

基本垂れ流しなのだ。

竜脈からくみ取った魔力は魔術回路に流れ、そこで自身の小源へと変換されるが、私の場合はその小源を使って竜脈からくみ取った大源の通り道を形成して制御し、大源を大源のまま行使するしかできない。

魔力を貯めておけないので、というよりも竜脈につないだ瞬間から常に魔力が溢れていくので基本溢れる魔力の方が多い。

コップにダムの水を注ぐにも等しい。

体への負担も大きいため、普段はそれほど利用しないのだ。

頭痛が起こるので戦闘では魔力枯渇に陥るような時ぐらいしか使わない。

だが、私はある構想をゼル爺から学んでいる。

「制御を変えて、凝縮する。十を一に、万を一に」

流動魔術の系統の一つに凝縮という物がある。

魔力消費がデタラメで使うものなどいないというのが通説だ。

何せ凝縮というのは水の操作という第一要素のほかに圧力という第二要素が関わってくる。

そうなればかかる魔力は倍ではすまない。だから使い手などいない。

私にはちょうどいい物であったが。

魔力を気にする心配もない。

だが、ふつうの凝縮魔術ではセイバーにダメージを与えることはできない。

だから、私が元々凝縮するつもりだったのはこの垂れ流しの魔力である。

液体燃料のように徐々に私の中を渦巻く魔力が水のように圧縮される。

私の中で魔力は今、漠然としたものではなく水滴として受け取っていることだろう。

それが魔力として消費される瞬間、撃鉄と共に液体魔力は気体となって何万倍の魔力として膨張する。

これが私が今使える竜脈活用法だ。

質のいい魔力を水滴に圧縮して、三本しかない魔術回路に注ぐ。

「・・・・・・、なるほどこれはさすがに厳しい」

竜脈との接続はもう切ってあるが、私から流れる魔力は最優にも迫るものとなった。

制御できればすべて利用できるのだが、空気を詰め込まれた風船のように破裂寸前なので何割かは出ていってしまう。

だが、私の体を通して出ていった魔力という物は、ただの魔力ではない。

セイバーは一種の結界に閉じこめられているといっても過言ではない。

魔力結界というのはおこがましいが、暫定的に決めつけるならそれが妥当だろう。

体から離れた魔力は私に還元しようと働く。

セイバーの魔力と反応してセイバー自身の魔力にも干渉する。

異界だった。

水の中のように身動きと呼吸を制限されているかのような、息苦しい魔力。

この道場は、たった今私の戦場となった。

私が十全に動け、セイバーが私の魔力によりステータス値が減少する。

対魔力でも、この濃厚な魔力を無効化するのは一苦労だろう。

ここにさらに魔術を投入すれば、私の魔術は周囲の魔力と呼応し、Eランクの攻撃でもランクアップを図ることができる。

セイバーもさすがにただではすまないかもしれないと緊張で汗をかく。

士郎とライダーも辛そうだ。

他人の魔力に干渉されているのは存外気持ち悪い。

他人に自身の体を操られる魔術があるが、その時の感覚をさらに気持ち悪くしたもの。

セイバーの動きを鈍らせるということからも、この異界はすさまじいものであることがわかる。

「空気中の水素に干渉、水を生成！」

錬金術の源流とも言われる流動魔術。

これは粒子の流れに干渉して変化を与えることを極める魔術である。

しかし、私はこの魔術には欠陥があった。

流れを変えることもできるが、それは水に限る。

粒子全体を動かすこともできないし、もう少し鍛錬を積めば金属粒子ですら動かすことは可能だろうが、流動魔術の本懐は物質と物質を組み合わせて金［Ａｕ］を作り上げることである。

熟練の流動魔術師は長い鍛錬の果てには銀［Ａｇ］とルテニウム［Ｒｕ］から金［Ａｕ］とラジウム［Ｒａ］に錬成できる。

銀食器と貴金属や万年筆のペン先に利用されているルテニウム合金から金への生成が可能。

しかし、銀もそれなりに高価だしルテニウムは白金合金で使われることが多い。

わざわざ金を作るために銀とプラチナを用いるかと言われれば微妙だが。

ラジウムは扱いが困難で生成するにしても運用法がない。

さらに放っておくといつの間にか原子力による被爆を起こしかねない。

錬金術の基本である分解、再構成のうち再構成が私にはできない。

私には粒子を動かすことはできるが、金属を生み出すことはできない。

つまりは分離させた水粒子、つまりは水素を空気中の酸素と化合し、大量にできた水を流動魔術で動かすしかできない。

本来であれば、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの用いた月霊髄液『ヴォールメン・ハイドグラム』こそが流動魔術の真価であり、風と水の二重魔術属性を兼ね備えた者しか使うことはできない。

士郎の属性が『剣』であるように。

凛の属性が『五大元素［地水火風空］』であるように。

シエルの属性が『空』であるように。

私は『再現』することに特化した身。

奇跡を、技術を、現象を、魔術を、ただ『再現』することに特化している。

そこにアレンジを加えるには根幹から鍛え、魔術を理解し、理想の自分を想像し『再現』する必要がある。

これは、私の元々の魔術特性。

しかし、これは、ハルケギニアで私が持っていた魔術特性だ。

極まれに、死線を経験した者は異脳を持つことがある。
私は精神的な部分と肉体的な部分で損壊が激しかった。
そのとき、凛の魔力の一端が私に変化を与えた。
それは血による一族の継承。
宝石に込められた魔力と、凛の血を含む宝石の一端に触れることで開花した、元は遠坂一族の一人が魔術刻印に残していた魔術。
それが流動魔術。
流転し宝石に魔力を込める遠坂が持つ、物の流れを操る魔術。
私の宝石魔術と流動魔術はそうして開花した第二魔術特性。
流動。
血の巡り。
物の動き。
空気の流れ。
この世すべては廻っている。
その力は万物にあり、もちろん英霊にも存在する。

遠坂の流動魔術は秀逸だ。故に。セイバーの魔力が渦巻く中心点。

「私は、セイバーの魔力炉心を封殺する！」

魔力炉の場所を見抜くことにも特化していた。

水の弾丸はセイバーの魔力炉心、いわゆる魔力を生み出す器官を正確に打ち抜く。

流れの中心には急所が多い。一時的な刺激だが、それでも効果は高いはずだ。

これがただのガンドなら、セイバーが避けるまでもなく対魔力により霧散していた。

しかし、魔術の材料に用いられているのは空気中から生成した水。

そして道場に満ちる魔力はカタパルトのように加速装置となり、威力と貫通力をあげる。

魔力の流れを作り、増幅しながら進む水はさながら弾丸だった。

水の弾丸はセイバーの心臓付近に迫る。

それを聖剣で切り裂くが、勢いは止まらない。

衝撃だけがセイバーに襲いかかる。

魔力炉心という弱点を事前に知らせていたことが仇となった。

セイバーに流れる魔力は凜と士郎とのサーヴァント契約と、自らの魔力炉心で生成する魔力によって何とか保っている。

聖杯とのバックアップが途切れている今となっては、魔力炉心を狙われるのはセイバーにとってかなりの痛手だ。

「――――っく！」

水の弾丸のスピードも速い。

最速と言われるランサーの槍よりは劣るだろうが、なにぶん数が多いのだ。

それらすべてがセイバーの魔力炉心に狙いを定めている。

一瞬だけでも魔力炉心に攻撃が当たれば、それはセイバーの出力を大幅に下げることとなる。

対魔力を過信しているため、まさかこのような魔力でのごり押しに苦戦するなどセイバー自身も思っていなかっただろう。

慢心だ。私の実力を図り間違えたセイバーの失策。

魔力炉心に当たらないとはいえ、Dランク相当の魔術が衝撃を伴って襲いかかるという英霊でも地獄の攻撃に、ステータス値が通常時よりもダウンしたのも追い打ちをかける。

士郎もライダーも、まさかセイバーが苦戦するとは思わなかったのか、万が一のために顔をこわばらせる。

セイバーは四方から迫る水の弾丸に注意をし、私はセイバーの背後から水の弾丸を飛ばす。

流線型を描いたそれはセイバーの背中を吹き飛ばし、弓なりになったセイバーの体が宙を舞う。

「・・・・・・取った！」

私はセイバーの背後に当てた水の弾丸でセイバーの胸を反らせ、心臓付近に一発の水の弾丸を滑り込ませる。

完璧な攻撃。

入った。

私の頭の中が戦勝の鐘を鳴らしたかのように甲高く音を反響させる。

完璧な入り。

だが。

「・・・・・・やはり、甘い」

その一言で、私の背筋は凍った。

セイバーは体制を整えると水の弾丸をにらみつける。

私の後方に待機している水の弾丸は空気中の水素と酸素がなくならない限りは生成できるのだが、一気に膨れ上がったセイバーの殺

気にコントロールを失う。

「セリム。あなたは確かに強い、しかし、戦いとは最後の最後まで気を抜くものではない」

セイバーの聖剣が風を集める。

風の鞘だ。

それはなにを意味するのか、理解よりも反射的な攻撃で応対した。

だが、水の弾丸も空気中の魔力もセイバーの聖剣の一振りで霧散する。

風王鉄槌――――ストライクエア。

風の道が水を、魔力を退ける。

私とセイバーまで延びる一方向の道筋。

気がつけば、私はもう一度魔力を生成したところでセイバーの聖剣が首にかけられた。

「・・・・・・・・・・・・・・」

「私の勝ちですね、セリム」

一瞬の油断。

一瞬の判断が明暗を分ける。

私はセイバーの力の一端を封じただけで、勝った気でいた。

本来ならセイバーは幾多の攻撃手段を持っているが、剣術のみでの対応だった。

セイバーはより強力な手を取っただけなのに、私とセイバーの状況は反転した。

磨かれた聖剣の刀身。

私の魔術は屈した。

その後、急激に膨れ上がった竜脈の魔力を取り扱ったツケが廻る。

強力な頭痛と魔力酔いだ。

ふっと意識が遠くなり、私はそのまま気絶してしまった。

運命邂逅　7（後書き）

英霊に勝てるわきゃねえ。

運命邂逅　設定１　セイバー（前書き）

セイバーの設定です。

運命邂逅　設定1　セイバー

クラス　セイバー

真名　アルトリア・ペンドラゴン

マスター　遠坂凛・衛宮士郎

性別　女

属性　秩序・善

筋力　C

魔力　D

耐久　C

幸運　B

敏捷　C

宝具　A＋

風王鉄槌C

風王結界に用いる風を込めて一気に放出する。コンクリートを破砕するほどの威力があり、サーヴァント、まして魔術師に対しても有効な攻撃。消費魔力は少ない。ただしエクスカリバーが見えてしま

うため、聖杯戦争時では多用しなかった。

風王結界Ｃ
剣に纏うことで不可視とする。風が光の屈折率を変えているため、攻撃には問題はない。セイバーは普段から風を纏わせているが、セリムとの模擬戦時には解除した。

約束された勝利の剣Ａ＋＋
魔力を光に変換し収束、加速し放出する神霊レベルの魔術攻撃。熱量や光量は単純な破壊となり、攻撃手段としては一級品。ただし消費魔力が多いため、今は一発しか撃てない。

全て遠き理想郷ＥＸ
士郎により返還されたセイバーの鞘。持ち主を妖精郷に置くことであらゆる物理干渉をシャットダウンする。ただし、通常時では持ち主を不死性を与えるのみで宝具を展開した場合にのみ効力は発揮される。

クラススキル

対魔力Ｃ＋
セイバーのクラススキルだが聖杯からのバックアップがないためにランクダウンしている。魔術に対しての抵抗値。今のセイバーなら大規模儀式魔法は防ぐことができない。セイバーにダメージを与えるのなら、Ｂランク以上の魔術が必要となる。

騎乗Ｂ
騎乗の才能。セイバー自身の技術であるのでランクダウンはしない。自転車やバイク、果ては飛行機ですら乗りこなすことが可能。ただし、無免許のため、衛宮士郎が自転車以外は認めていない。

保有スキル

直感Ａ

戦闘時において未来予知に近い形で危険を察知する能力。

魔力放出Ａ

瞬間的に身体や武器に魔力を纏わせて強化する。セイバーはこれにより他のサーヴァントと打ち合えることができた。

カリスマＢ

戦闘において統率、士気を司る天性の才能。

補足

聖杯からのバックアップが無い状態のため全体的なステータスはダウンしている。それでもスキルは健在であり、生半可な攻撃ではセイバーに傷をつけることすらままならない。

凛が正式なマスター。凛と士郎の魔力はパスで繋がっているため、二人の魔力総和がセイバーの現界を成立させている。

魔力炉心は正確に動いているため、魔力の生成を自分で行える。だがマスターがいなければ炉心が起動しないため、やはり凛か士郎のどちらかがマスターにならなければいけない。士郎が無茶苦茶魔力を使っても魔力炉心があれば一応の現界は可能となる。

魔力炉心が動かなくなるとセイバーの体の中で一時的に魔力の流れがストップするため、大幅な戦力ダウンに繋がる。特に対魔力と魔

力放出が使えなくなる。

運命邂逅　設定１　セイバー（後書き）

聖杯戦争の時よりステータスはランクダウンしています。

運命邂逅　8（前書き）

みんなのトラウマ、マジカルなあいつが登場。

アンバーではありませんよ？

運命邂逅　8

ＳＩＤＥ　セイバー

セリムの体が崩れ落ちる。無理な魔術行使のツケが廻ったのだろう。

「・・・・・・っく、」

あの攻撃と洞察力は危険だった。魔力炉心の存在が私を精一杯つなぎ止めているのに、そこを魔術ではなくただの物理衝撃で突破しようとする魔術師などいなかった。正確無比な攻撃に私も冷や汗をかき、久々に危険を感じた。

私が対魔力の強いセイバーでなければ死んでいただろう。

「セイバー、大丈夫か？」

「ええ、シロウ。私は大丈夫です。それよりセリムを」

「わかった」

シロウはセリムを連れて道場を後にする。シロウの姿が消えた瞬間、私は膝をつく。風で吹き飛ばしたセリムの魔力残滓が干渉を始めたのだ。

「ライダー、すまない」

「ええ」

分かったのか、ライダーは怪力で私を外に連れ出す。セリムの魔力はサーヴァントにとって毒だ。竜脈を利用した魔力の応用法というが、違う。あれはそんな、生やさしい物ではなかった。

もっと強力な魔力の奔流。あの英雄王が自身の愛剣を解き放つときにも似た、魔力が強大な威圧を持つもの。

凛は気がついていない。人が感じ取れる魔力量を大きく逸脱する魔力には魔術師でさえ鈍感になる。

シロウは解析で分かっただろうか。セリムの魔力。その根幹が。

でなければ、ライダーと一緒に動揺するなどあり得ない。シロウが感知できる魔力量ではない。

であれば。シロウ、あなたはセリムになにを見たのだ。

「・・・・・・結界」

ぽつりとライダーが呟いた。

「あの魔力は周囲を遮断し、まるで結界の役割を担っていました。あなたのステータス値が急激にダウンしたのは、マスターとのレイラインを阻害されたからです」

「な、なんという・・・・・・では、ライダー、あなたも?」

「ええ。桜との繋がりが一時的とはいえ疎遠になりました。あそこ

で戦っていたのがセイバーではなく私であれば、消えていたかもしれませんね」

絶句する。以前、シロウにも冗談で言ったが、本当にセリムが聖杯戦争に参加しないでよかったと思う。異質だとも思っていたが、まさか契約遮断の副次効果まで有るとは。

「セイバー。あなたは最後、一瞬とはいえ本気でしたね？」

「恥ずかしながらそうです。しかし、セリムの攻撃は見事だった。正確に私の弱点を見抜くとは」

「ええ。もしかしたら直死と同じ効果の魔眼でも宿っているのかも・・・・・・」

「魔眼・・・・・・ですか？　しかし、セリムの眼は何も変わってはいなかった」

「あくまで推測です。直死は死を視ることだけに特化したモノですが、セイバーの魔力炉心を一発で見抜いたセリムの攻撃は異常にすぎる」

確かに。私は存在を明かしてはいましたが、魔力炉心がどこにあるかなど普通は分からない。それをセリムは的確に攻撃をしてきた。

つまりは、セリムには何かがはっきりと見えていた。

「侮れませんね。まだ5歳だというのに」

「伸びしろと将来性は高いですね」

全く、シロウというセリムといい。デタラメな魔術師が多くなった。

「これは、私もさらなる研鑽が必要ですね」

セリムの一撃を背中に感じながら、私はポツリと呟いた。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ＳＩＤＥ　衛宮士郎

それは異質な魔力だった。セリムが竜脈を制御し始めてからだ。

結界に近いモノなのはすぐに分かったが、それ以上の情報は手に入れられなかった。

例えるならライダーが聖杯戦争時に張った神殿結界のような魔力の巡りが、一応地脈や霊脈を利用したモノであるとしよう。肌に張り付く不快感と内外の違和感が感じられ、結界内は異様な雰囲気となる。

しかし、セリムの魔力が増大したことを俺は一切感じられなかった。世界の魔力が空間に及ぼす効果は俺にはすぐに分かる。だが、元々のセリムの小源が変質したことは分かったが、それだけ。

だが、セリムから流れる魔力は竜脈と呼ばれる地下深くから吸い上げているというよりも、セリムの体の中から急激に湧きだしてきたかのような感じがした。

魔力は一切吸い上げていない。つまりは、あのセイバーやライダーが苦しんでいた魔力は、特殊な魔力でありなおかつセリムが生成したことにある。

こんな魔術は俺も遠坂も使えない。セリムの固有技法ということになるが、自身の魔力を別のモノに変質させる魔術というのは聴いたことがない。

セリムのいう『再現』魔術でも自身の根源たる魔術特性を変えることなど不可能だ。

「・・・・・・まさか・・・・・・・な」

では、セリムの魔力が急に変わったことに対する答えは一つしかなくなる。セリムの内面世界から漏れだした、セリムの心象世界の浸食。

俺が固有結界の制御で投影魔術を行えるのと同様に、セリムも自身の心象世界から、別の魔力を引き出すことが可能であるのなら、あの魔力についてとセイバーたちの変容についても一応の説明は付く。

セリムは固有結界を持っていて、あの魔力がそこから溢れだしたモノであるとすれば、セリムの固有結界は霊的、魔術的な存在についての制限を与えるものであれば納得のできる話だ。

宝石爺からセリムの話は聴いているし、いつかセリムが体に固有結界を宿すというなら俺が鍛えることも考えよう。

今はまだ情報が少なすぎる。あれは固有結界から溢れだしたもの

だとしても、そうではないとしても。とにかく今は静観だ。対応は早い方がいいだろうが、まだセリムには早い。

全く。心配ばかりかけさせやがって。

セリムを布団で寝かせ、俺は昼食を作りに台所に向かった。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

水の音が聞こえる。水滴が落ちるような、少し高い音。

そこはどこまでも続く水の中だった。息はできるが、無重力にも似た浮遊感が少し気持ち悪い。プカプカと空気を吸わない私の体は下へと向かっていく。呼吸ができるのに空気がないとは。だけど、不思議と気にはならなかった。

水に体が満たされる。満足感と安心感が私に訪れる。

ふと目を開ける。やはり、光は遠い水の中。テレビでしか視たことのない魚や海の生物がいる。そこは地上とはまた違う様相を構える世界だった。

その中を突っ切っていく黒い影。鮫だ。魚は成す術なく腹に入れられている。一斉に逃げ出す魚は、鱗をかすかな光で反射させながらどこか遠い場所へと向かっていく。

鮫は私の存在に気がついたのか、私めがけて一直線に向かってくる。立派な牙は私を食らおうと迫り、鮫の体にはいくつも刻まれた創痍があった。弱肉強食の世界の掟だ。弱い者は死ぬしかない。

目を閉じる。鮫の牙が私の腕を食らう。痛みは無い。だが喪失感があった。

悪夢に咀嚼される。じわじわと私は食べられていく。それでも体は沈んで行き、最後に鮫は、私の頭を食いちぎった。

Ｒｕｔｅ　１－６

目を開けると、そこは士郎の部屋だった。

痛みを訴える体を無視して布団をはねのける。セイバーとの模擬戦に熱中しすぎて、確か魔術回路を開けっ放しだった。スイッチを閉じていくと、今までくすぶっていた痛みが襲いかかってくる。

背中に打撲。手は痛い。足も無理な走法をしたせいか、少し違和感を感じた。

とりあえず、年齢詐称薬を服用して子供の姿に戻る。今日は夜から凛の魔術講義だ。

今の時間は・・・・・・午前１７時。セイバーとの鍛錬が午後１３時だったから、４時間ほど寝ていたことになる。

・・・・・・。お腹すいた。

「・・・・・・とりあえず、何か食べよう。話はそれからだ」

立ち上がり、士郎の部屋から出る。

台所からはいい匂いが漂ってきた。士郎が作っているのだろうか、

コンソメの匂いからおそらくコンソメスープを作っているのだと思うが。それに合うのは洋食。久しぶりに洋食を食べることになる。

「お、もう起きて大丈夫なのか？」

士郎はやはり台所に立ち、料理を作っている。主夫という言葉がとっても似合う。鍋の中には対セイバー用か、たくさんのコンソメスープが作られ、隣ではハンバーグの種がおいてある。

今日はハンバーグか。

急にお腹が空いてきた。

「ほら、セイバーには見つかるなよ」

士郎が出してきたのはおにぎりだ。そんなに大きくはないが、間食をするにはちょうどいい。そのまま食べる。塩味が効いていておいしかった。

後一時間もすれば夕食となるだろう。その後は魔術講義を受け、１０時には寝る。子供は寝る時間に寝ろと士郎はうるさい。凛よりお母さんみたい。たまに魔術講義で遅くなっても基本大らかなのは凛。

何だろう、この性別を間違って生まれてきた二人は。

「もう少しでできるから、遠坂を呼んできてくれ」

「了解」

私は凜を呼びに行く。居間を抜け、凜の部屋まで。士郎の部屋から遠い離れに住んでいるので少々遠回りらしいが、初日で迷子を経験済みなので簡単にたどり着くことができる。

同じタタラは踏まない。良い言葉である。

階段を上りきる。凜の部屋では魔術講義で使う試験管やら宝石やらがおいてあり、多少ぐちゃぐちゃだ。片づけられない女なのか、凜が手を出すとなにかしらヤバい物が見つかる。

「・・・・・あれ、何か騒がしい？」

凜の部屋からは最早戦闘しているのではないかと思うぐらいの轟音があがっている。所々凜の怒声にも近い声が響き、なにやらいやな予感がする甲高い声が聞こえる。

すごく帰りたい。

しかし、士郎に頼まれた手前、このまま帰るのも。

部屋の前で立ち往生し、入るべきか入らざるべきか。人生の論題、いや、なにやらこの後の人生において汚点とも言える功罪を残してしまいそうで怖い。

ドアを手に掛け、入るかどうか悩む。が、しかし、私の意志に反して中をみたいという好奇心と中からやばい香りがする警戒反応がせめぎあっている。

夜中にトイレに行けなくなるのを分かった上で心霊番組を見てしまう心の葛藤にも通じる何かがあった。

・・・・・・・・・・・・・。何バカな考察してるんだろう。

いや、私はなにも視なかったし聴いていない。

よし、帰ろう。

「あ、ちょ、待ちなさい！」

凜の声とともに部屋の扉が開く。振り向いた先には、杖があった。

どこぞの魔法少女が使いそうな杖があり、実用性、攻撃性皆無のはずなのだが、なにやら威圧感を放つそれは私めがけて飛んできた。

落とそうか？　と一瞬悩むが、その杖は宝石、特にダイアモンドでできている。凜の教育には宝石を丁寧に扱うことと念を推されているため、判断が鈍った。

「あ、セリム！　だめ！　避けなさい！！」

凜の声が飛んでくる。しかし、その時にはもうすでに杖は私の顔に迫り、持ち手部分をクネクネさせながら迫ってくる。生理的な嫌悪を感じた。

私の視界が光に包まれ、そして。

メイクアップに入った。

「うふっ！　私はマジカル少女セリムちゃん！　来たわね凜！　あなたの物欲に染まった感情を、きっちり叩きなおしてあげるんだか

ら！」

すごく恥ずかしい台詞がすらすらと喉から伝う。しかも、凛に向かってマジカル少女セリムちゃんと、どこぞのアニメキャラクターのような言い回しの自己紹介をする自分に、一気に虚脱感が遅いかかってくる。

ポーズまでずばっと決めて何だが、たぶん顔だけは羞恥に染まっていることだろう。

うふっ！　って。私・・・・・・あああああああああああああ・・・・・・・・・・・・！！

この杖、やはり凛が関わっているなら厄介なものに決まってる！
凛はついうっかりで他人の大切な領域を天然で踏み荒らすような行動を取るときがたまに有るんだから！

「・・・・・・ルビー。セリムを解放しなさい。それ、一生物のトラウマなのよ」

「全く凛さんは遊び心がない。日本人なら寛容な心でわびさびを理解してくださいよ」

いや、もう、杖が私を支配していることはわかった。なるほど、これは一級品の魔術礼装で人工的に意志が宿っているのもわかる。だが、それとこれとは話が別だ。

なにが言いたいかというと、早く解放してくれとしか言えない。

「むむ、この子はすさまじい力を宿していますね。未来ある若人は

どうして私の心を揺さぶるのでしょう」

「はいはい、分かったから。早くセリムを解放しなさい。溶かすわよ」

「もったいない症候群に刈られている凜さんが、宝石である私を溶かす？　寝言は寝てからいいなさい！　せっかく手に入れた肉体を簡単に手放すほど私は落ちぶれてはいません。それならば道具は道具らしく、魔法少女チックな物は魔法少女チックな行動に出るのが王道と言うもの！」

ルビーというステッキはそういい放つ。私自身に魔法少女という単語から連想されるのはお約束だの変身だのの知識しかない。テレビの日本アニメ特集で色とりどりの女の子が理不尽に怪物をリンチするという内容のみ。

しかも虫の息の相手に容赦なく即死魔術を放つという鬼畜ぶり。その死骸を片隅に放置しつつ手を取り合う少女たち。

つまり私の中では魔法少女＝ヤバい魔術師。

アニメだから、個人の趣味だから、どうせフィクションだしと思っていた節もあるが、こうも現実に動く杖などみてしまうと、しかもそれが凜の所有物であったとすれば尚更、自分の状況がこの上なく危ないと言うことが如実に頭で分かってしまう。

というか、私の声でこれ以上凜を挑発しないでほしい。

「・・・・・・ルビー、セリムをどうするつもりなのかしら？　まさか、その格好で外に？　笑わせないで」

格好？

いやな予感がして、融通の利かない体を少し動かして目線を下げる。赤い服。しかもフリフリ。

日常生活では特殊性癖の持ち主でなければ手を出さないであろう格好。

こんな格好で外に？

いやいや、いやいやいや。フザケるな。

「外ですか。ふふん。それもいいでしょう。そして、私が求めているのはスペクタクル！　友情、努力、勝利の三文字！　ということで私は今から正義の味方の物まねでもしようかと思います！　ちょうど近くに死徒もいるようですし、あでゅ～凜さん！！」

ルビーは私の体を操って窓から飛んだ。そう。文字通り空中浮遊。魔術の類では大がかりな儀式が必要にもなる空中浮遊を私は今体験している。

こんな状況でなければ楽しめただろうが。

ああ。ハンバーグが遠のいていく。

「マジカル少女セリムちゃん！　華麗に悪を退治するわよ！」

子供の肉体なのがせめてもの救いだった。

運命邂逅　8（後書き）

みんなのトラウマ、マジカルルビーです。

運命邂逅　ＥＸ　薄幸少女（前書き）

ＥＸ＝エクストラ。

つまりは余分な話です。

だけど、ここであの不憫な子が登場。

そして伝説へ。

運命邂逅　ＥＸ　薄幸少女

「ああ、心が満たされる」

路地裏から解放された私を小鳥たちが祝福しているわ。今は寝台列車に揺られているけど。

偶然手に入れた一週間の温泉チケット四名様。影の薄い私が手に入れた幸運。しかも、町から離れているから大丈夫。あの怖い人たちは来ない。

遠野君を誘いたかったけど、温泉だし、吸血鬼さん怖いし、先輩も怖いし。

結局生前というか人間だった頃のコネクションが全く役にたたないから、私とシオンといつの間にか路地裏同盟に参加していたリーズバイフェさん。それと名誉顧問であるレンさんを誘った。

結局レンさんは猫の会合があることを理由に断られた。代わりにちくわをもらった。

「サツキ、顔が歪んでいますよ」

「だって久しぶりの遊び場っていうか遠出だからね。楽しまないと損だよ。あと歪むじゃなくて綻ぶぐらいの言い方でいいからね」

「すみません。計算違いです」

「シオン、どう計算していたのかな？」

車窓に揺られて旅をする。すこし懐かしい感傷に浸りながら、目的地を目指す。今から行くところは『冬木市』。数年前には謎の怪死事件や連続昏睡事件など、なにかしらきな臭いことが起こっていた場所だ。

シオンが言うには聖杯戦争の舞台だったらしい。まあ、そんな訳の分からない言葉はどうでも言い。秘境的温泉を目指して冬木を目指そう。

とその前に、目の前に座っているリーズバイフェから聴かなければいけないことがある。

「で、どうしてあなたがここにいるんですか？」

「ひどいな、サツキ。こいつも同じちくわを食った仲だろう」

「ん？　なんにゃさっちん。文句でもあるのか～にゃ？」

リーズバイフェの隣にはなぜかレンさんの代わりにネコアルクさんがいる。時たまふらっと現れては意味不明な発言をして帰る目の前のナマモノは、何か決定的に間違えた存在に思える。

たまに見かけるのは地上から宇宙へと飛翔するときか、燃え尽きながら大気圏突入をする時くらい。

「レンさんからもらったちくわを奪って、なおかつ勝手についてきただけじゃないですか！」

「でも、いいやつだ。キモカワイイ」

「リーズバイフェさんは騙されていますよ！　キモいだけですって！」

「そうなのか？」

「いいや？　私、とっても誠実に致しておりますにゃ？　たまにトラブルを持ってくるだけでずいぶん敵視されてるにゃ？　それと、私はどこからどう見てもプリティガールじゃにゃいか」

たまに？　たまにだと？

「サツキ、仲間外れよくない」

「そうにゃそうにゃ、言ってやれ我が同胞よ！」

同胞。このナマモノと私たちは、確かに同じ根城にすむが、決して同胞というような間柄ではない。むしろ合う度になにかしらやっかいごとを押しつけてくる諸悪の根元。

じぃっと見つめていると、ネコアルクさんも見つめ返す。沈黙、閃き、納得、そして羞恥。

「にゃにゃにゃ、さっちん、そんなに見つめられても、わたし、メスだから応えることは難しいにゃ。　事務所と、あと、旦那通してもらえる？」

ぽっと頬を染めてネコアルクさんは返答する。マテ、どういう経緯でそのような頓珍漢な結論が隆挙される。自意識過剰と言わざる

をいない回答に若干引いていると、シオンが驚いた顔を向けていた。

「・・・・・・サツキ、さすがに計算違いです」

「違うよ！？　なにネコアルクさんの言動を真に受けちゃってるのよ！」

「なあに、私は別にかまわんと思う。趣向は人それぞれだ。それを否定する立場に立つことは、その人物の否定に繋がる。サツキがバイでもレズでも、大いに結構。ただし私に被害が及ばないことを前提としてくれ」

「サツキ。短いつきあいでありますが、貴女は私の思考を狂わせる」

「違うって！　私は、その、ほら！　ネコアルクさんも何か言ってよ！」

「熱海では、激しかったにゃ」

「サツキ、大胆」

「なるほど、熱海とは、計算通りです」

「うがーーーーー！！」

こんの人外共め！！　人として越えては行けない性別の壁を肯定するばかりか、私に何を期待しているのか絶妙な相掛けなどかまして！

別に羨ましくないもん。ただ、ほんのちょっとだけ、仲間に入れ

てくれたらなぁって。いつもさ、ほら、私って目立たないしいつの間にかイジられてるし。

死徒の一人になっても人間の心を忘れない私にとっては、この旅行は目一杯、『人間らしい行動』をするために来たのだ。

忘れていた人間性を取り戻すため、未だになれないネズミとの攻防に一区切りつけるため、久しぶりに人間として食事を取るため、そして路地裏同盟の関係の強化の為だ。

観光名所に行っては『おぉ～』と驚きたいし、まあ冬木って観光名所じゃないからあんまり目立つとこもないみたいだけど。せめてわくわくざぶ～んにはいきたいのだけれど、ここって温水プールなのかしら？　と悩んでいたりもする。

流水だと、死ぬ。

吸血鬼から継承された死徒らしい弱点を残した恨めしいこの体。

ああ、本当、救われないなぁ。

「む、サツキ、どうかしましたか？　怒ったと思えば急に黙って」

「ああ、うん、何でもない」

「そうですか。サツキ、私は冬木教会に知り合いが居るので途中抜けますが、サツキはどうしますか？」

「知り合い？　いたの？」

「今日のサツキはいつになく毒を吐きますね。まあ、風の噂で知ったので知り合いというよりもお互いに名前しか知らない関係ではありますが。それでも私と合理的な思考面で共感する魔術師がいるのです。ちょうどエーテライトを張り巡らせたところ、今冬木教会でお世話になるみたいで」

「シオンがここまで長文を話すのも珍しい。それで、行きたいの？」

「できれば。彼女は確かフリーランスの魔術師です。この先、教会から埋葬機関が派遣されないことの方が希。故に関係を結びたいのですよ」

粛々と語るが、確かにシオンは合理的に判断している。まあ融通が利けばいいんだけど。

「まあ、いいよ。いいよね、シオンは。私なんて人間の知り合いなんて遠野君しかいないし、最近はアルクェイドさんと海に行ったり、妹さんと買い物に行ったり、メイドさんと焼き肉をかけた地下闘議場での殺試合なんてしてるのに、私には一切イベントがないし・・・・」

これは世界の何らかの意志なのだろうか。

遠野君に近づこうとするたびにどこからともなく剣が落ちてきたり鋭利な物で切り裂かれた鉄骨やら信号やらが私めがけて降ってくる。

地味にそのおかげで危機察知にかけては獣のような反応をしてしまう私。

あれは明らかに先輩かアルクェイドさん。ええい、そこまで私が遠野君に近づくのが許せないのか！

「いいじゃないもうハーレムっぽいもの形成してるんだから、というか私が近づけば警戒するのにシオンは普通に屋敷に出入りできるし妹さんともなかなかいい関係を結んでいるみたいだし遠野君も歓迎してるみたいだし、あのナマモノだっていつの間にか屋敷に合体ロボよろしく体を分解させて進入してるしメイドさんからなにかしらの反応をもらっているしレンさんだって元々遠野君のところで飼われている猫だしリーズバイフェも時たま誰かにお酒をもらって帰ってくるのに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・私だけ、もしかしてぼっちだったり？

いやいや、だって日中はでられないからさ、日光で焼ける。シオンは半分だから平気みたいな顔してたけど死徒の私にはハードルが高すぎるって。だってさ、日光に腕だしたら煙がでるんだし。

慣れしかないのかな。こうやって死徒は巣立っていくのかな。弱点を克服するごとに人間生活に戻っていけるのだけれど、その分追われるリスクが高くなるジレンマ。

今は保湿クリームと日焼け止め、さらには腕を覆うような服と全身を包むほど大きい日除け。その下には学制服。

怪しさ爆発で死にたくなる。それでも朝や昼には強力な日焼けになったときぐらいの激痛が体に降り懸かって来るというのに。

あ、もう死んでるや。はははははは・・・・・・はぁ。

「お母さん、先たつ娘を許してください・・・・・・」

「サツキ、貴方の母親は死徒襲撃の際にはなくなったのではありませんか？」

「そうにゃ。この前一緒に葬式したにゃ。まあ、そのときのお供えは私がこっそり貰っておきましたが」

「うん。サツキ、現実逃避よくない」

絶望した！　この三人の容赦ないつっこみに絶望した！

でも、いいたいことも分かる気がする。いつまでもこのままじゃいけない。そう、私、変わらなきゃ。

暗い路地裏で生涯を過ごすなんて私の小学校の時の夢じゃない。私は幼いときには夢があった。今では現実に絶望して日がな一日、猫さんと遊ぶ毎日。

これはダメだ！　自分でもわかってたけど、今の暮らしは惰性に生きているだけ。

輝いていない。意味がない。

だから私は影が薄いとか幸が薄いとか、キャラが薄いとか、いろんなところが薄くなってしまうのだ。

目標は打倒アルクェイド！　・・・・・・さんは怖いからシエル先輩！　・・・・・・は一応ほら、先輩じゃない？　後輩がたてつく相手じゃないし。せめて琥珀さんとか翡翠さん並に存在感が出た

ら、私だって・・・・・・。

私だって？　私だって何かできるんじゃない？

遠野君に声をかけてもらえるかもしれない。

遠野君とお話できるかもしれない。

遠野君が私に気がついてくれるかもしれない！

そうだ。私だって、輝いてやる！　いつかなんて、もうイヤだ。努力だってする。苦しいことだって耐えてやる。

それだけで恋した人に声をかけてもらえるならば！　自分が『私って影うすいのかなぁ』っていう疑問に４日も悩むことはなくなるはずだ。たまにシオンからかけられる『サツキ、いたのですか？』という地味に心に響くことも言われなくなる！

そう。そうよ。

「うん、決めた！」

「サツキ、なにを決めたのですか？」

私はもういじいじ悩んだりしない。一度死んだような命だもの。

常識の範囲内で国家権力に追われない程度の生活と、非常識な範囲で吸血鬼の真祖やら教会の代行者に目を付けられない範囲で、何か新しいことをやろう。

できるだけ楽しくって。できるだけ笑えて。今の不幸なんてぶっ飛ばすくらいの強力なさっちんアームで招き寄せることのできる人としての人生を、幸運を、未来を！！

「シオン！」

「はい」

「リーズバイフェさん！」

「何だ？」

「ナマモ・・・・・・猫アルクさんはいいか」

「・・・・・あちしの扱いひどくない？　ねえ、ひどくない？」

「私、決めたよ」

私がこれから生きていく為に必要なもの。それは自由とお金と生き甲斐だ。だから、私は・・・・・。

「漫才しようよ！」

「「「はぁっ！？」」」

「そうね、放課後！！路地裏同盟で！」

漫才を練習することにした。

運命邂逅　ＥＸ　薄幸少女（後書き）

そしてあの同人アニメへ。

さっちんは伝説になったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7417v/

絶望の少女は第二魔法の担い手と会う

2011年11月28日08時57分発行